『Dragon Sword Saga 3』砂漠の謎

かがみ透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『Ｄｒａｇｏｎ　Ｓｗｏｒｄ　Ｓａｇａ３』砂漠の謎

【Ｎコード】
Ｎ３１５１Ｙ

【作者名】
かがみ透

【あらすじ】
普段はよろず屋、実は二つの伝説の剣を持つ青年傭兵ケイン。穏やかで、無欲な彼を、伝説の戦士と信じて付いていく妖精ミュミュ。
異次元から、雷獣神を呼び出すという、最強の召喚魔法を操る、美少女戦士マリスと、美青年魔道士ヴァルドリューズのコンビと、次元の穴を塞ぐ旅に同行するケイン、魔法剣の傭兵カイル、魔道士見習いに転向した巫女のクレアで、旅の仲間が結成される。

アストーレ王国の魔物と次元の穴を塞いだ一行は、魔道士参謀ダミアス、フェルディナンド皇国に住む木の魔道士バヤジッドと親しくなる。

辺境に出現する、魔界と通じる『次元の穴』。
それを塞ぐため、アストーレから近い砂漠に向かうご一行『白い騎士団』。
だが、どこか違う？
マリスを狙うベアトリクスからの刺客と対決。
ケイン懐かし（？）の敵も現れ、大昔に起きた帝国の謎にも触れる。
時空を越えたマリス、最大のピンチ！？
分離した守護神『獣神サンダガー』が暴走！？　世界も大ピンチに？？！？
マリス、ヴァルドリューズとはぐれたケインは、サンダガーを止めることが出来るのか！？

※自作サイト『Ｍｙｓｔｉｃ　Ｒｈａｐｓｏｄｙ　～　ミスティック・ラプソディー　～』、投稿サイト『２０代から中高年のための小説投稿＆レビューコミュニティ』にも、掲載しています。

これまでのあらすじ・登場人物

†　これまでのあらすじ　†

普段はよろず屋、実は二つの伝説の剣を持つ、旅の傭兵ケイン・ランドールは、
妖精のミュミュを連れ、さびれた村を訪れた。
そこで、魔法剣を持つ傭兵カイル、巫女で今は魔道士を目指すクレアと出会い、
不思議な魅力を放つ男装の美少女戦士マリスと、
相棒の謎めいた魔道士ヴァルドリューズの旅に同行する。

大国ベアトリクス王国の出身であるマリスは、大魔道士ゴールダヌスの命で、
東方の魔道士ヴァルドリューズと共に、獣神『サンダガー』を呼び出し、
魔物の吹き出す次元の穴を潰してまわる旅をしていた。
マリスとヴァルドリューズの目的は、
最終的には、復活する魔王との対決も考えられるのか――！？

マリスは、伝説のゴールド・メタル・ビーストの化身『獣神サンダガー』を、
守護神に持つという稀な人材であるのが災いし、追われる身となる。
現に、ゴールダヌスと敵対する蒼い大魔道士ビシャム・アジズは、
マリスを手に入れようと現れ、ケインの持つ伝説の剣のをも警戒する。

アジズの能力(ちから)は、上級魔道士ヴァルドリューズをも凌ぐという。
ヴァルドリューズの考えでは、ケインの持つ伝説の剣でなら、
彼のかなわない魔の手からも、マリスを守ってやれるのではないか、
と。
ケインは、伝説の剣を、彼女を守ることに
役立てようと決心したのだった。

果たして、ケインは、
伝説の剣の力を発揮することが出来るのか――!?

†　登場人物　†

ケイン（１８）……二つの伝説の剣を持つ戦士。
本職は傭兵で、普段はよろず屋。

マリス（１６）……失踪中のベアトリクス王国王女。
剣と武浮遊術(ぶゆうじゅつ)を操る少女戦士。

ヴァルドリューズ（２４）……マリスの相棒。上級魔道士。

ミュミュ【妖精】……ケインと旅をしてきた、子供のニンフ。

カイル（２０）……チャランポランで女好き。軟派な傭兵。

クレア（１８）……元巫女で魔道士見習いの少女。

バヤジッド（６２３）……フェルディナンド皇国に住む、木の魔道士。

サンダガー【神】……マリスとヴァルドリューズによって、召喚される雷獣神。

ライバル！？（1）

嘆き、悲しみ、空しさ、絶望――
旅人よ、気を付けなさい
迷えば、永遠に彷徨(さまよ)うであろう
百年、五百年、千年と――

人だけでなく、
すべての生き物だけでなく、
時には、大国さえも、抜け出せず
もがき、苦しみ、埋もれていく――！

魔神の痕跡
忘れ去られ

愚かな過ち、繰り返すは、
悲劇を、またも繰り返す

眠られよ
今は、ただ、静かに――

――『砂漠地方言い伝え』より　吟遊詩人の唄

プロローグ

「うう、疲れたよ～」
「もう少し行けばなんとかなるわよ」

「だけど、もうずっと歩いてるのに見付からないなんて、やっぱ、道間違えたんじゃないかなぁ？」
「……かしらね」
「え～っ！　もう、魔力も大分減っちゃったし、疲れたし、眠いし、町まで戻る気力もないよ～！」
「あ～、もう、うるさいわね！　だったら、その辺で寝るわよっ！」
「は～い、おやすみなさ～い」

第　？　話　『ライバル！？』～　１　～

『白い騎士団』を名乗る一行は、中原のアストーレ王国の首都であるアトレ・シティーでウマを購入し、地図にもない未開の地を進む。
確かな情報もなく、魔道士ヴァルドリューズの言う大魔道士ゴールダヌスの予言を、頼りにするほかない。
『未開の地には、次元の穴が出現している可能性が最も高い』という、ただそれだけを――。
「アストーレで集められた情報だと、『向こう岸』から来た人達は、みんな南下して、遠回りしてアストーレに入ったって聞くぜ」
傭兵のカイルが、長くストレートな金髪を、かき上げながら、そう言った。
「でも、それだと日数はかかるし、みんな魔物を避けて通りたかったからでしょう？
それじゃあ、意味が無いじゃない」

白い甲冑に身を包んだ、少女戦士マリスが答える。
「だけどさあ、どこまで続いてるかわかんない荒れ地を、ただひたすら突き進んでいくなんて、無謀過ぎないか？　ヴァルが、魔法で魔物の居場所を突き止めればいいじゃないか」
カイルが再びそう言うと、
「まあ、なんてこと言うの！？　広範囲に渡る『透視』は、魔力の消耗がずっと激しいのよ」
すぐさま、巫女であり、魔道士見習いでもあるクレアが、目を吊り上げた。
「じゃあ、ちょっと行ってみて、迷ったらヴァルに『視(み)て』もらおうかしら」
マリスの発言に、それこそ無謀だと皆で言いかけた時、
「私は、それでも構わない」
というヴァルドリューズの一言で、決まってしまった。返す者はいなかった。

そこは、アストーレから西へ向かった未開の地だった。
周りには何も無く、ごつごつした岩ばかりの荒れた土地だ。
アストーレの魔道士参謀ダミアスの言った通り、町らしいものは、どこにも見当たらない。
一行は、岩に腰掛け、赤い飴玉をマリスから受け取り、なめていた。
知り合いになったフェルディナンド皇国に住む、木の魔道士バヤジッドが作った、
一日に必要な栄養分の詰まった飴玉で、なんとか飢えを凌いできているが、ほのかに

果実のような味がするだけで、美味いと感じたり、満腹感が得られたり、ということ
もなく、どこか満たされない。
「ちょっと偵察に行ってくるわ」
マリスはウマに飛び乗った。
「俺も行く」
もう一人の傭兵であるケインが、ウマに跨がろうとすると、カイルが冷やかすような声を上げた。
「おいおい、ケインは、もうマリスに雇われてるわけじゃないんだろう？　マリスは、俺たちよりも強いんだから、何も、そう護衛して回らなくてもいいんじゃね？」
マリスは、ちらっとケインを見て、ウマを走らせた。カイルの言うことには、少々引っかかったが、ケインは後を追った。
「ほんとに、どこもかしこも荒れ地だなあ」
馬上で、きょろきょろしながら、ケインが呟く。
「ケイン」
皆のところからかなり離れたところで、マリスがウマを寄せる。
マリスは、年齢よりも幼く見えるケインの顔立ちの、さらに、青い、ネコのように目尻の上がった大きな瞳を、睨むとまではいかないまでも、見つめて続けた。
「あなたねえ、あたしが王女だからって、何も、特別扱いすることないのよ」
アストーレを出る頃、マリスが西洋の大国ベアトリクスの王女であり、現在の女王、王太子に次ぐ第二王位継承権者であることを知ったケインは、亡命したベアト

リクスからの追手や、彼女の高い魔力に目を付けた大魔道士から守ろうとするあまり、彼女の後をくっついて回っていた。
「……さすがに、鬱陶しかったか？」
ケインが苦笑いする。
マリスは、その紫水晶のような瞳を、じっと彼に向けていた。
「そんなことしてると、そのうち、みんなに、あたしに気があるんじゃないかって、思われちゃうわよ」
ドキン！　と、ケインは心臓が大きく音を立てた気がした。
図星を突かれた思いだった。
確かに、マリスには興味を持ち、惹かれていく自分もいるのは否定できなかった。
だが、その反面、彼女の予想外の行動には常に圧倒され、そのペースに付いていくのは楽なことではないとも思う。
ましてや、亡命中とはいえ、王女の身。ベアトリクス王太子の許嫁、すなわち婚約者でもあるのだ。
どう考えても、普通の恋愛に発展しようのない相手だった。
（そんなヤツにホレでもしたら、きっと心労で身も心もズタズタになり、人生を棒に振るのは間違いない！）
そう懸命に、ケインが自分に言い聞かせている間も、そんなことは知る由もないマリスは、構わず続ける。
「だから、王女だなんて知られたくなかったのよ。あたしはね、王位継承権なんて放棄してるのよ。それを、公の場で示すヒマがなかっただけでね。二度とあの国には、

戻る気はないんだから」
うつむき加減に少し唇を尖らせる。
その様子は、どこか可愛らしさがあり、やはりセルフィス王子に未練があるのだと、彼は確信した。
「だからね、王女だってことは、意識しなくていいの。あたしはね、みんなとは普通に仲間でいたいの」
怒っているような目をケインに向けるが、セルフィスのことを知ったケインには弱みを握られてしまったように思っている彼女が、取り繕っているのだろうと、ケインは解釈し、あえてそれにのって、たじろいだ様子を装った。
「俺は、ただ……、どこで、あの蒼い大魔道士が、お前を狙っているかわからないんだし……」
「ふ～ん、そう」
マリスは、面白くなさそうに、打ち切った。
「つまり、あたしのことを、守ってやろうってわけ？　少なくとも、あたしは、その辺の王女殿下よりも頑丈なつもりだけど？　」
「確かに、それもそうだな」
ケインは、わざと考えているポーズを作る。
マリスは、面白くなさそうに、それを横目で見ている。
「わかったよ、マリス。だったら、俺は、今まで通りに、お前と接するようにするよ」
何か言いた気な目を向けていたマリスは、「よろしくね」と、横目でいうと、無言のまま、ウマを元の方向に戻し、進ませた。

「しばらくは、このまま荒れ地が続いているわ。遠くで砂埃(すなぼこり)が見えたか
ら、もしかしたら、その辺りから砂漠に入るのかも知れないわ」
マリスが説明する。
「いよいよ砂漠か……。ああ、マジに通らなきゃいけないのかよぉ〜！？」
カイルが、思いっ切り嫌そうな顔をした。
「何よ、砂漠くらいで、そんな声出すなんて」
クレアは、情けないと言わんばかりに、呆れた表情でカイルを見る。
「クレアは、モルデラから出たことなかったんだろ？　だから、砂漠の辛さを知らない
んだよ」
普段はヘラヘラしているカイルだったが、こればかりは、ぶーぶー言い返す。
「砂漠なんてさ、水がなくなったら終わりなんだぜ？　日差しは容赦なく、ガンガン
照りつけてくるしさー、食料になりそうな実のなった木なんか、どっこにも生えてな
いしさー。
それに、何よりも、目印になるモンが何もないんだぜ？　砂丘は風向きでどんどん
形を変えてくし、砂に足を取られて、前に進むのさえままならないってのに。ぐるぐ
ると同じところを永遠にさまよいつづけるか、そのうち砂地獄にはまっちまうかが
いいところだぜ」
あえて悲惨なことばかり言って、クレアを怖がらせて楽しんでいるのは、ケインに

はわかっていた。
　案の定、クレアは真に受けて聞いていて、顔から血の気が引きかけていた。
「で、でも、砂漠には、奇麗な水の湧き出るオアシスがあるっていうし、バヤジッド
さんからもらった飴もあるから、食べ物の心配もないし……」
「いやあ、わかんねえぞ。オアシスに辿り着く前に、逝っちまう人はいっぱいいる
ぜ。そのせいか、夜になると、砂漠には死霊が出るっていうし、そんなヤツら相手に
して
たら、夜が明けちまって寝不足にはなるわ、そのうち、バヤジッドのアメもなくなっ
ちまうかも知れないしな」
　カイルのいうことをますます真に受けたクレアは、今にも悲鳴を上げそうだ。
「さ、じゃあ、そろそろ出発しましょうか」
　何事もなかったかのように、マリスがウマに跨がる。
　不安気な面持ちで、マリスに手を引っ張り上げられ、前にクレアが乗る。ウマに
乗ったことのないクレアと、マリスが一緒に乗り、後は、一人ずつウマに跨がって
いる。
「ふえーっ、あれでも女とはねぇ。あいつ、怖いモンねえのかな？
」
　カイルが、ケインにだけ聞こえるように言った。
「だけど、俺、実は強い女も好きなんだ」
　カイルは、そう続け、にやっと笑ってみせた。
　ケインにとっては、人生を棒に振っても痛くも痒く感じない男の、勇気ある発言で

あった。

「ねえ、この『正義の白い騎士団』って、誰がリーダーなの？」

辺りは相変わらず荒れ地にごつごつした岩が転がっているだけである。

小さなニンフのミュミュが、バタバタ飛びながら、代わり映えのない景色に飽きてきたのか、誰にともなく聞いていた。

その前に、『騎士団』とありながらも、そこに『騎士』はいなかった。

唯一、騎士の経験のあるマリスが、アストーレでは、流浪の騎士マリユス・ミラーを名乗っていた時に適当につけた一行の名称であったが、誰も気に留めず、そのままにしてあるのだった。

「そんなの決まってんじゃん」と、カイルが言った。

「マリスだろ？」と、横からケイン。

「俺だよ」カイルは、けろっと答えていた。

ケイン、クレア、マリスは、ウマから落ちそうになった。

「カイルだったの？」

「当ったり前だろ？　騎士団一セクシーなイケメン男子であるこの俺の魅力で、このチームはもってるようなもんなんだぜ」

「へー、そうなんだー……？？」

意味のわからないことを得意そうな顔で言うカイルに、ミュミュは目を白黒させていた。

「なーに言ってんだか。マリスと一、二を争うトラブルメーカーのくせして」

ケインの呆れたセリフに、カイルは、ぽんと手を打ち鳴らし、き

らきら瞳を輝かせた。
「おお、それ、いいな！　もらったぜ！　俺にはリーダーなんてのより、ふさわしい呼び方があったじゃないか！　騎士団一のムードメーカー、カイル様かぁ！」
「そうは言ってないっつうのに、相変わらず人の話聞かないんだから」
呆れているケインを始め、クレア、ミュミュ、そして、マリスまでが口をぽかんと開けていた。

次の偵察は、ケインとカイルで行う。
夜になろうという頃だが、岩場が続いているので、どこかせめて草の生えている場所を探しに出かけたのだった。
随分先に行ったところに、木や草のあるところが見られる。
そこでなら、野宿が出来そうだと、二人が引き上げようとすると、カイルがウマを止めた。
「どうした、カイル。何かあるのか？」
ケインがウマを寄せる。
「人が倒れてる。二人。……あれは、女だ」
そう言い終わるか終わらないうちに、カイルはウマを走らせる。ケインも後を追った。
カイルの言った通り、そこには、二人の女が倒れていた。
彼が抱き起こしたのは、黒髪で二〇歳くらい、女にしては、かなりの長身で、底の厚いロングブーツを履いているため、立てば、ケインたちに追いつ

きそうなほどで
ある。
部分的に甲冑を着けていて、腰に剣を差していることから、一見
して剣士であるこ
とがわかった。ただし、剣士にしては、かなり露出度の高い黒い衣
装に、押し付けが
ましいほどの色気をまとっている。
もうひとりは、小柄で、セミロングの金髪がふんわりしたカーリ
ーヘアの、十四、
五歳の少女だった。
こちらは剣士ではなく、ひらひらしたピンクの服の上にマントを
はおり、更に、
いろいろなアクセサリーを身に着けているところを見ると、どうも
魔道士らしかっ
た。
「息はあるぜ」
カイルが言う。そのままにしておくわけにもいかず、ケインたち
は、彼女たちを運
ぶことにした。
カイルは、小柄な少女の方を抱いて、ウマの鞍に乗せた。
彼の好みからすれば、当然色っぽい方なのだろうが、重さで選ん
だのだろうと、
ケインは踏んだ。
『色男、金も力もなかりけり』――アトレ・シティーでそう言っ
た彼の笑顔を思い
出す。
「どうしたの？　その人たち」
マリスが、偵察から戻った二人に近寄る。
ケインは目のやり場に困りながらも、黒髪の女剣士をウマから抱

きかかえて、降ろ
した。
「お二人とも、気を失っているだけだわ。こういう時は、水を飲ま
せてあげた方が
いいわね」
クレアが、二人の額に手を当てたりなど、軽く診察して言った。
「この先、砂漠に入ろうっていうんだから、水がもったいないわ」
ごきっ！
クレアが水筒を取りに行きかけたが、マリスが、ケインの抱えて
いる女剣士の背に
活を入れた。
クレアもケインもびっくりして、目を見開く。
女剣士も、跳ね起きた。
「大丈夫？　しっかりして！」
次にマリスは、カイルがウマから降ろしたばかりの少女の頬に、
しれっとした顔
で、往復ビンタをくらわせていた。
（なんてひどいことを……！）
（こ、この乱暴者……）
クレアとケインは、なす術（すべ）無く、目を見開いてそれを見ているだ
けだった。
「いったぁ～い……」
ふわふわした金髪の少女が、赤紫色（マゼンダ）の目尻に涙を浮かべながら、
ゆっく
り起き上がると同時に、ケインの抱いている女剣士も完全に目を開
いていた。
「大丈夫か？」
女剣士の目と、ケインの目が合った。
切れ長の綺麗な青い瞳の、かなりの美人だったのだが――！
びたん！

いきなり左頬を平手で叩かれたケインは固まっていた。クレア、カイルも、停止している。
「この私に許可無く触わるなんて、いい度胸してるじゃないの！」
美しいアルトで、彼女は言い放った。
「いやぁ～ん、イケメンさんだ～！　マリリン、ラッキー？」
巻き毛の少女は、少し鼻にかかった甘えた声を出し、ぴとっとマリスにくっついた。
すると、突然、マリスが立ち上がったので、少女は地面に尻餅をついてしまう。
「いったぁ～い！　ああ～ん、スーちゃ～ん！　このお兄さんたら、ひどいのよぉ～！」
少女は、両手で目をこするようにして、わああわあ泣き出した。
スーちゃんと呼ばれた女剣士は、すっくと立ち上がると、威圧的にマリスを見下した。
予想通り、一八〇セナ以上あるケインやカイルに追いつくほどの、かなりの長身で、迫力もあり、並ぶと、マリスが小柄な女の子に見えてしまうほどである。
「ちょっと、ぼうや、マリリンちゃんに、何するのよ！」
腕を組み、見下したまま、スーは言った。
「そっちこそ、それが助けてもらった人に対する態度かしら？　しかも、ひっぱたくなんて、あんまりなんじゃないの？」
マリスも負けてはいなかった。ふんと小馬鹿にしたような笑いを浮かべている。
それを受けて、スーは、驚いて一歩下がり、再びマリスを見る。

「あんた……女だったの！？　」
女剣士スーは、マリリンと名乗る少女を振り返る。
「ちょっと、マリリンちゃん、この人、女だわ！　」
「ええ～っ！？　うっそぉ～！　マジで～～！？　」
マリリンは、両手をグーにし、顔の側にもっていき、思いっきりブリッコポーズでリアクションしていた。
マリスは、不気味なものでも見るように、マリリンを見る。
「へー、あんたも、女剣士だったの。ふうん」
スーは、落ち着きを取り戻し、マリスを上から下までじろじろと眺めてから、ふふんと笑った。
「この私の他に、女の身で剣士だなんてものには初めて出会ったけど、……な～んだ、まだガキじゃないの」

（ひっ！！　）

固まっているケインたちをよそに、スーの口攻撃は続く。
「ほんとにそれでも女なの？　かわいげもなければ、色気もない。ま、女剣士なんて、所詮はそんなものなのかも知れないけどね、私以外は。ほーっほほほ！　」
片方の手は腰に、もう片方の手は口元に添え、スーは、耳につく高笑いをしてみせた。
ケインたちは、ヒヤヒヤしながら、マリスを見る。
マリスは目を見開き、呆気に取られていたが、ふっと冷静な笑いを漏らす。

ライバル！？（2）

「あんたが女剣士だなんて、わらっちゃうわね。そんなフザケた格好で剣士が勤まって？
剣の腕よりも、せいぜいその下品なお色気を磨くくらいしかしなんでしょうけど。
ほーっほほほ！」
マリスは、スーと同じポーズで高笑いを返していた。
（売られたケンカを、しっかり買ってる！）
ケイン、クレアは、ますます固まった。
「バカにして！　私はね、剣の腕だって、結構立つんだからね！
それに、色気だって、私ならではの立派な武器じゃないの！　磨いてどこが悪いのよ？　あんたみたいな小娘には、逆立ちしたって無理でしょうけどね！」
多少の色仕掛け技を使えるマリスを知るケインとしては、その挑発に簡単にマリスが乗るとは思わなかったのだが――
「ムネがデカすぎる女は、頭が悪いって相場なのよ！」
「なんですって！？　この男女（おとこおんな）！」
「露出狂！」
二人の女戦士たちは、妙なことでケンカになっていた。
それを、傍観していたケインたちの間に、いつの間にか、マリリンが割り込んでき
ていた。
「このおにいさんも、このおにいさんも、ス・テ・キ？」
マリリンは、身体をくねらせながら、ケインとカイルに、ぽ～っとした視線を送っ

てくる。彼ら二人は、二、三歩後退る。
「ねえねえ、スーちゃん、この人とこの人と、どっちがいいと思う？」
マリリンは、ケインとカイルの腕の間に、勝手にぶら下がっている。
「うるさいわね！　今取り込み中――！」
振り向きざまに、スーは、はっとしたように口を噤(つぐ)んだ。
彼女の視線は、ケインたちを通り越し、その後ろにいたヴァルドリューズに、釘付けになっていた。
スーは、うっとりした目でヴァルドリューズを見つめ、思わず溜め息と言葉を漏らした。
「……ス・テ・キ？」
（ひえっ！）
マリスたち一行は、ヴァルドリューズ以外、皆、固まってしまっていた。
その場では、マリリンのきゃっきゃ笑う、楽しそうな声だけが聞こえる。
「なんて知的で美しい男……！　見たところ、どうやら魔道士のようね」
スーが、ケインたちを押しのけてヴァルドリューズに近付き、片手を腰に当て、
その豊満な胸を突き出すようにしながら、流し目を送る。
ところが、ヴァルドリューズの方は、眉一つ動かさず、いつもの冷たい視線を注いでいるのみであった。
「だめーっ！　ヴァルのおにいちゃんは、ミュミュのなんだからーっ！」
ミュミュが、ヴァルドリューズとスーの間に、パッと現れた。

ピンク色の髪に、ピンク色の瞳をつり上げている。
「ひゃっ！　何よ、これ！？　よ、妖精！？　」スーが、驚いて、後退った。
「きゃあっ！　コワイー！　」マリリンも、ケインとカイルの腕に夢中でしがみつく。
「コワイだとー！？　何で妖精をこわがるのさーっ！？　かわいがれー！　」
ミュミュが両手をぶんぶん振り回し、二人の間を飛び回る。
「いやあ～！　来ないでぇー！　」
「シッシッ！　あっちへお行き！　」
「なんだとー！　」
マリリンは泣き叫び、スーはミュミュを追い払おうとするので、ミュミュは一層怒って飛び回った。
「ちょっと、あなたたち！　」
それまで圧倒されていたクレアが我に返る。
「出会い頭に人は殴るわ、ケンカはするわ、馴れ馴れしく甘えるわ――非常識も甚だしいわ！　まずは、助けてもらったお礼を言うのが、人としての礼儀ではなくて！？　」
「そうだ、そうだ！　クレア、もっと言ってやれーっ！　」
ミュミュがヴァルドリューズの盾になっているつもりなのか、彼の前からは離れずに、クレアにエールを送る。
「『親しき仲にも礼儀あり』と言うでしょう？　ましてや、初対面なら当然のことです！　いいですか？　そもそも、挨拶というものは、昔々――」
クレアが語り始めたばかりであったが、
「ふぇ～ん、おにいさん、助けて～」

ケインに、マリリンが泣きながら抱きつく。ケインがよく見ると、嘘泣きのようであったが……。
「ちょっと、あんた、いちいち泣かないっ！」
マリスが、マリリンの首根っこを引っ掴んだ。
「うきゃーっ！　スーちゃん、助けてー！」
マリリンが手足をバタバタさせて、余計に泣き声を立てた。
「乱暴はよしなさいよ！　男女っ！」
「露出狂！」
事態は、また振り出しに戻っていた。
わけのわからない女どものケンカに、ケイン、クレアがうんざりしてきた時、
「あのさあ、お取り込み中、悪いんだけど……」
カイルが初めて口を開いた。
「きみたち、誰？」

「私は見ての通り、美人女剣士のスー」
長身の彼女は、手を腰に当て、長い黒髪を、色っぽい仕草でかきあげて言った。
「はぁ～い、美少女魔道士のマリリンでぇ～す」
金髪巻き毛少女は、手をグーにして、ブリブリ腰を振りながら、にっこり笑う。
「実はぁ、マリリンたちぃ、町の人に頼まれてぇ、魔物退治してるんですぅ。
だけどぉ、道に迷っちゃってぇ、しょうがないから眠ってたんですぅ」
マリリンは、両手を組み合わせる。
道に迷うというと、ケインは、ある人物を思い出さずにはいられないのだが。
「ね、眠ってた！？　どう見ても、あれは、行き倒れだったぞ！？

」
驚いているケインに向かって、マリリンはきゃっと笑った。
「よく言うわよ。あんたたち、寝ている間に、私に変なことしようとしたくせに！　」
スーが、じろっとケインを睨む。
（だから、ぶたれたのか。ひどい誤解だ……）
ケインの左頬には、スーの手の跡が、まだうっすらと残っていた。
「よく寝たからぁ、何だかぁ、体力も復活しちゃったみたいですぅ。うふっ、ラッキー？」
マリリンが、小さい手でピースをしてみせる。
「どうでもいいけどね、あんた、そのたるい喋り方、なんとかなんないの？　」
マリスに睨まれて、マリリンは、「きゃっ！　」と、しゃがみこんで大袈裟に耳を塞いだ。それには余計にマリスが何か言いた気であったが。
「その、魔物退治を頼んだ人たちの町っていうのは？　」
「トアフ・シティーよ」
ケインの質問には、スーが威圧的態度で答えた。
「結構大きい都市だよな。だけど、ここまで遠いんじゃないか？　ウマでも数日かかるだろ？　なんで、こんなところまで？　」
「トアフ・シティーでは、魔物を倒した者には、その魔物の死体と交換に賞金が配られるのよ。もうあの周辺には魔物がいなくなったから、賞金稼ぎたちは、皆遠出をするようになったの」
「早い話がぁ、マリリンたちも賞金稼ぎなのでぇ、魔物の出る噂のところを捜しているうちにぃ、こんな辺鄙（へんぴ）なところにまで来ちゃったんですぅ」

ケインたちは、顔を見合わせた。
「おい、どう思う？　あいつら、魔物を倒せるほどの腕があるってことか？」
ケインは、隣にいたカイルに、小声で言った。
「さあな、魔物を斬るには、それ専用の剣がいるだろ？　っていうと、あのおねえちゃんの持ってるロング・サーベルは、対魔物用ってことか」
「あっちのマリリンって子の方も、魔道士だって言ってたけど、あんなんで本当に魔法が使えるのかな？」
「魔法に関しては、俺も全然わかんねえからな。ただ、俺が思うに、あんな風にひけらかしているのよりは、ほのかに漂う色気の方に、ずっと魅力を感じるってことだな」
ケインは、カイルを不審な目で見つめる。
「……おい、何の話だ？」
「だから、あの色っぽいけど高飛車なおねーちゃんよりは、もうちょっと露出は抑えてもいいから、やさしくて、しとやかなオトナの女の方がいいってことだよ。あの『コドモ』は問題外だな」
「誰が、お前の好みの話なんかしてるんだ？」
カイルは、目をパチクリさせた。
「俺は、自分のわかることだけ答えたんだよ」
（……こいつに聞いた俺がいけなかったらしい）
カイルとケインのやり取りには気付かないクレアは、笑顔になっていた。
「あなたたちの目的が、魔物退治ということなら、私たちと一緒だわ！　お互いに

情報交換したり、協力して、頑張りましょうよ！」
「なんですって？　あなたたちも魔物退治をしてるっていうの？」
スーは、嫌そうな顔で、じろじろと一行を見回した。
「人数が多かったら、それだけ賞金の分け前が減るじゃないの。冗談じゃないわ！」
ぷいっと、スーは横を向いた。
「それなら安心して。私たちは、賞金のためにやってるのではないんだから」
クレアは、にこやかに答えた。
「じゃあ、何のためにやってるっていうのよ？」
訝(いぶか)しそうに、スーがクレアを見る。
「もちろん、正義のためです！」
クレアは、きっぱりと言い切っていた。クレアのきらめく瞳を、スーとマリリンは、怪訝そうな顔で見る。
「世の中、金を越えるものがあると思って？　正義なんて金にもならなきゃ食えもしないじゃない。そんなもののために魔物退治をしてるなんて、おかしいんじゃないの？」
スーの言葉に、クレアはショックを受け、その場に硬直して動かなくなった。
「そうだよ、世の中、お金よぉ！　お金を貯めて、素敵なドレスやアクセサリーをいっぱい買うの！　そうして、お金持ちの王子様に見初められて、マリリン、結婚してお姫様になるのぉ～！」
マリリンは、きゃっきゃはしゃいでいた。
ケインもカイルも、青ざめた顔で、引いていた。
「……てことで、私たちは、あんたたちとは手を組まないわ。今回

は見逃してあげる
けど、今度会った時は、商売敵として容赦しないから、覚悟なさいよ」
スーは、威圧的に、一行を見下した。
「そぉ～よぉ～、マリリンたちぃ、すっごく強いんだからぁ、あんまりナメないこと
ね～」
マリリンもブリブリしながら続く。
「覚悟するのは、そっちだわ」
腕組みをしたマリスは、いつもの不適な笑いを浮かべる。
「そうよ、正義をバカにするなんて、人として許せないわ！」
クレアも、キッと二人を睨む。
四人の女たちの間では、今や火花が飛び散っていた。
ミュミュも、ヴァルドリューズに、ぴとっと、くっつきながら、例の二人を睨んで
いるが、男達にとっては、実に、どうでもよかった。
「マリリンちゃん、引き上げるわよ」
「うん、スーちゃん」
マントを翻(ひるがえ)し、ぷいっと、彼らとは反対方向に歩き出した二人であった
が、すぐに戻ってくる。
「ウマ一頭くらい、譲ってくれてもいいんじゃなくて？」
スーは、両手を腰に当て、威張って言った。
この荒れ地を歩いて行こうなどとは、自殺行為に等しいと言えた。自分たちの命に
かかわることでもあるというそんな時でも、やはりスーは高飛車なのだった。
またケンカにならないうちに、ケインは乗っていたウマを下りて、譲った。
「お礼は言わないわよ」

スーとマリリンは、さっさとウマに跨がると、土煙を上げて、ものすごい勢いで行ってしまった。
「まったく、なんて人たちなの？　あれが人にものを頼む時の態度かしら？　お礼も言わないし」
「そうだよ、ケインも、なんであんなヤツらに、すんなりウマを引き渡しちゃったのさ！？　あんなの、ほっとけばいいのにさー！」
クレアとミュミュは、目を吊り上げて、ぷりぷり怒る。
ケインは、カイルのウマに乗せてもらおうと向かうと、マリスが言った。
「あたしがそっちに移るわ。男二人の体重は、ウマにはキツいわ。ケインは、あたしのウマにクレアと乗ってあげて」
あれほどのケンカ（？）の後ではあったが、彼女は、もういつもの表情に戻っていた。
ウマの綱をケインに預け、カイルのウマに乗る。
ケインも、クレアの後ろに乗り、偵察の時に見つけた、草の生えた場所目指して進んだ。
口にこそ出さなかったが、出来れば、この先、あの妙な二人組とは、会わずに済ませたいものだと、誰もが思っていた。

「……なんでいるのよ」
カイルと同じウマの上で、マリスが呆れた声を出した。
「だぁって、マリリンの水晶（クリスタル）も、こっちだって言ってるんだも～ん」
例の女剣士と少女魔道士が、一行とウマを並べていた。

ケインの譲った一頭に、マリリンと、その後ろにはスーが乗っている。
マリリンは、首から下げた、てのひらサイズの水晶球のネックレスを、自慢気に揺らせてみせた。
「そっちがマネしてるんじゃないの？」
長身の美人剣士が言う。
「じょーだんじゃないわよ！　あんたたち、淋しいんなら、素直にそう言ったら？」
「淋しいだなんて、見損なわないでちょうだい！　私たちは、そんなことで、会いたくもないあんたたちに、我慢してまでも、こうして追いかけてきたわけじゃないんだからね！」
スーが、つんけんしながら、マリスに言い返す。
「まっ、やっぱり、私たちの後をつけて来たんだわ！」
馬上で、ケインの前に乗っているクレアが、嫌そうな顔を向け、小声でケインに言った。
「あんたたち、不思議な飴を持ってるでしょう？　ちょっとくらい、くれたっていいんじゃなくて？」
馬上で、スーが手に腰を当てた。
（ああ、おなか空いてたんだな……）
ケインは、目を丸くしていた。
「マリリンのクリスタルが言ってたよお。体力回復出来る飴なんだってねぇ？　どんな味なのぉ～？」
マリリンが人差し指を、物欲しそうにくわえている。
「……腹が減ったんなら、そう言いなさいよ……」

呆れて怒る気力もおこらなかったマリスが、いくらかうなだれて言った。
「それよりも、きみたち、この先には、何があるか知らないか？砂漠で魔物が出たとか、そういう噂とか聞かないか？」
ケインが尋ねると、スーが手を腰に当て直し、踏ん反り返った。
「ほーっほほほ！　そんなこと、この私が知るわけないでしょう！」
「えへっ、マリリン、知ってるよぉ。だけど、賞金取られちゃうから、教えてあげなぁ～い！」
マリリンは、にっこり笑った。
賞金目当てでないことは知らせてあるにもかかわらず、同業者でライバルだと思っている一行に対して、すんなり情報を提供する彼女たちではなかった。
「ほら」
諦めたように、飴玉を別の小袋にいくつか移し、マリスがそれを渡そうと手を伸ばす。
「ほーっほほほ！　礼は言わないわよ！」
スーは、ひったくるようにして小袋を奪うと、二人の乗ったウマは、土煙を上げて、素早く遠ざかっていった。
「あぁ～ん、スーちゃぁ～ん、マリリンにも早くちょうだぁ～い！」
「うるさいわね！　今開けてるんでしょ！」
二人の会話は、微かに、それだけ、一行に聞き取れた。

ライバル！？（２）（後書き）

今後ちょこちょこ登場する二人組です。

刺客（1）

それから、しばらく進み、一行は休憩を取る。
周りは、相変わらずの荒野で、前方にはひどい砂埃が見える。
マリスが予告した通り、そのあたりから砂漠に入るようになる。
「やっぱり、砂漠を通らなくちゃいけないのかしら」
クレアが、不安そうな表情で、ケインに尋ねた。
「どうかな。ヴァル、次元の穴は、どの辺か、もうわかるか？」
ケインはウマから下りて、木陰で座っているヴァルを見るが、彼はピクリとも動かない。瞑想に入っているようだ。
邪魔をしてはいけないと思ったミュミュが飛んできて、ケインの肩に止まり、一行を見回した。
「ミュミュも魔物のいるところくらい、わかるよ。今のところは何もいないみたい。
それに、妖精の力は、人間の魔力と違って減ることはないんだよー」
「だったら、ミュミュ、見てこいよ」
ケインが言うと、彼女は目を見開いた。
「やだっ！　何かあっても、ヴァルのお兄ちゃんは瞑想中だし、誰もミュミュのこと助けらんないじゃないの！　だから、やだよー」
「……あ、そう……」
ケインは、仕方のなさそうに横目でミュミュを見る。
ふと、別の木陰では、カイルが地面に倒れ込んで、呻き声を上げていた。
「どうした、カイル？　へばったのか？」
ケインは、彼に近寄っていく。クレアも、後に続いた。
「……な……んな……おんな……」

彼の呻き声が聞き取れると、クレアは呆れた顔になって、戻って行った。
「……おい……」
ケインも呆れて、カイルの肩を揺さぶるが、俯せたまま、カイルがぶつぶつ言い出す。
「アストーレを出て、何日経ったっけ？」
「何日って……、まだ一週間くらいじゃないのか？」
「一週間！？　まだそんなもんだったのか！？　俺はまた一ヶ月以上も経っちまったかと思ったぜ」
「だって、何晩寝たか、思い出してみろよ。そんなに経ってないはずだろ？」
「そんなもん、思い出したくもねえよ！　ごつごつした岩場か、マシなところでさえ、草むらの上だ。
柔らかいベッドの代わりに、寝袋なんかでスマキになって……それに、もうずっと女の子とデートしてない。喋ったり、お茶もすらも。こんなことは、いくさ以来だ！」
ケインは、呆れてカイルを見下ろしていた。
「砂漠になんか行ったら、ますます女が遠のいていく。ああ！　いったい、いつになったら、町やら村やらに着くんだ！？」
「あのなあ、俺たちは、次元の穴を探してるんだぞ。町や村を観光しに行ってるわけじゃないんだから」
ケインは、無理矢理カイルを抱き起こして、座らせた。
「お前もヴァルみたいに瞑想して、煩悩を追い払ったらどうだ？そうすれば、女が

いなくても、辛くないだろ？　」
　冗談混じりにケインが言うが、彼の耳には全く入っていない様子だった。
「ああ、スーちゃんみたいな刺激的なカッコ見せられると、余計に女恋(ひと)しく
なっちゃうよなー。一ヶ月も、この俺が女の子と遊んでないなんて……！　」
「だから、一週間だってば。お前、スーちゃんのこと、あんまりよく言ってなかった
じゃないか。露出は抑えてでも、しとやかで、ほのかに香る色気の方がいいって。
まーったく、言うことがコロコロ変わるんだから」
　思わず呆れた言葉が、ケインの口をついて出ていた。
「お前さあ、スーちゃんと初めて会った時、なんでマリスがあんなに怒ったのか、
わかるか？　」
　すわった目をしたまま、カイルが言った。
「突然何を言い出すんだよ」
「アストーレで、マリスは、マリユス・ミラーって名乗って、少年騎士を装ってただ
ろ？　自分から男装してたし、いろんなヤツに男扱いされても、ずっと平気だったの
に、なんでスーちゃんには珍しく感情をさらけ出して怒ってたのか」
「それは、スーちゃんが、あからさまに挑発したからじゃないのか？　」
　カイルは首を振って、人差し指を立ててみせた。
「俺が思うには、マリスは、自分の女としての自信があんまりないんだよ。だから、
スーちゃんとかマリリンみたいに『女らしい』やつらを見ると、羨ましくて嫉妬し

ちゃうんだろう」
「……ひどいこと言うなー」
「あいつだって、スタイルはいいし、色気が全然ないわけじゃないんだけど、どうしても、女性的っていうよりは、中性的じゃん？　年の割には大人びてるけど、スーちゃんの色気は、あれは年の功だ。いくらマリスが頑張っても、すぐに身に付くもんじゃない。コンプレックスを刺激されたから、あんなに怒ってたんだよ」
　カイルは、いつの間にか元気を取り戻していて、生き生きと喋っていた。
（なるほど、ヤツの原動力は、やはり『女』なのか。女の話をしているだけで、こんなに元気が湧いてくるとは）
　ケインは、妙なことに感心した。
「それで、お前、マリスとはどうなんだ？　」
「は！？　」
　唐突なカイルの質問に、ケインは面食らった。
「トボケるなよ。アストーレでお姫さんと結婚しなかったのは、マリスに惚れてたからだろう？　だから、一緒に旅することにしたんだろう？　」
　カイルは、ふざけてケインの首に巻き付き、締め上げた。
「ち、違うってば！　」
「ウソつけ！　でなきゃ、なんでアストーレを出て、その上、マリスにくっついて回ってるんだよ。それって、好きだからだろ？　白状しちゃえよ！　」
　カイルは、マリスの素性は知らない。ここで、ベアトリクス王女であることを打ち

明けるのは、彼女の意志ではないのは、ケインもわかっていた。
苦し紛れに、なんとか脱出を試みる。
「カイル、お前こそ、実はマリスが好きなんじゃないのか？　さっきからマリスの話
ばかりだし、俺に、こんなにしつこく彼女のこと聞くのが、その証拠じゃないか」
ぱっと、彼の手がケインから離れた。
「な……なんで、わかったんだ！？」
「なに！？　ホントだったのか！？」
カイルは、ぷっと吹き出し、腹を抱えて笑い出した。
「じょーだんだよ、じょーだん！　ああ、おかしー！　ケインて、からかうとおもしれーな！　また頼むわ！」
彼は、笑い過ぎて目尻に涙を浮かべながら、ケインの肩をぽんぽん叩いた。
ケインは、口をあんぐり開けたまま、怒る気力も湧かなかった。

「ヴァルが瞑想から戻る前に、あたしも身体を動かしておこうかしら」
マリスが腕を回しながら、ケインとカイルのところへやってきた。
「ケイン、特訓するから付き合って。あっちに木陰がちょこちょこあったの。そこでどう？」
カイルにからかわれた後で、ケインはカイルの視線が気になった。
「わざわざ場所変えるなんて、アヤシイなぁ～。ホントに特訓かねぇ」
案の定、カイルが口笛を吹いて冷やかす。
マリスは、焦るでも怒るでもなく、にっこり笑ってみせた。
「なんなら、ここでやってみせてもいいし、カイルも一緒に、ケインと二人がかりで

かかってきてくれてもいいわよ。その代わり、ここがどうなっても知らないし、ケインみたいに武遊浮術身に着けてないと、怪我しない保証は出来ないけど、それでもいいんなら」

カイルの表情が、冷やかし顔のままで固まった。

「なんで、あたしが毎日特訓してるか、教えてあげましょうか？『獣神サンダガー』を召喚するようになってから、やたら食欲が湧くし、一日一回は暴れないとストレス貯まるのよ。発散しないと、サンダガーのコントロールも、うまく行かない気がするから。

野盗でも魔物でもいればいいんだけど、ここのところ出くわさないし。ケインが相手なら、あたしも手加減なしでいいから、一番助かるのよ。でも、カイルも協力してくれるんなら嬉しいわ！　是非、一緒にお相手願うわ！」

マリスが手を合わせて喜ぶと、みるみるカイルの顔が引き攣っていく。

「……頼んだぞ、ケイン。俺の分まで」

ぽんとケインの肩に手を置くと、カイルは、ヴァルドリューズの隣に座り、脚を組んだ。

「ボクは、ここで、煩悩を追い払うため、瞑想してるので、邪魔しないで。どうぞ他でやってください」

「だそうよ、ケイン。行きましょ」

唖然としているケインの腕を、マリスは引っ張っていった。

以来、カイルは、二人のことは冷やかさなくなった。

ケインの身体が、大きく宙を舞う！　場所に着いた途端、マリスが一瞬のうちに
彼を背負い投げたのだった。
大きく飛ばされたおかげで、咄嗟に体勢を整えて着地することが出来たケインで
あるが、それを待っていたのは、繰り出される突きであった。
それを受け、払いのけ、蹴りも躱(かわ)していく。
一頻(ひとしき)り暴れたのち、マリスは、実に爽やかな笑顔になった。
「やっぱり、ケインだと安心して攻撃出来るから、助かっちゃうわ！」
彼の方は、彼女の攻撃を、いくらかヒヤヒヤしながら受けていたのだったが、彼に
とってもいい特訓であった、と自分に言い聞かせておくことにした。
それにしても、暴れた後で見せる、晴れ晴れとした笑顔を見ると、彼としても、
良い思いをした気分になれた反面、
（やっぱり、マリスって野蛮人だよな。……王女のくせに）
と、思わずにもいられないのだった。

「あそこに行商人(キャラバン)がいるわ。行きましょう」
マリスの指さした方角、砂漠の手前に並ぶキャラバンの群れへと、ウマを進める。
砂漠を渡るには、ダグラという、ウマとは別の動物に乗り換える必要があった。
ウマでは、砂に足を取られてしまい、思う通りには進めず、ウマの疲労も大きい。
ダグラは、ウマと似た外見だが、ウマよりも、首が持ち上がった分、体高が大きく、尾はトリのようにふさふさと吹き出し、頭にもふさふさの毛が、トサカのように

立っていた。
足の指もトリのように、三つ、四つに別れ、砂をかき出せる水かきのような、厚みのある砂かきがついていた。
頭から長い白い布を被り、茶色の皮膚をした、西洋とは人種の違う行商人たちは、ダグラに関しては、リブ金貨よりもウマと交換したがっていたので、一行の乗っていたウマの分しか手に入らなかった。
キャラバンの出店では、他に、水や食料、日除け用の布や雑貨などが、並んでいる。
日除けの布と食料、大きめの革袋に入った水と、小分け用の水筒などを買い、道案内人をひとり頼むと、マリスとカイル、クレアとケイン、ヴァルドリューズで一頭ずつダグラに乗る。
進むごとに、地面は徐々に砂地に近くなっていった。

「お客さん、運が良かったアルよ！　この間まで振っていた大雨も、つい昨日止んだアルよ。砂漠、乾くの早いアルから、もう地面は砂に戻ってるアル！　」
二本のヘビのような、変わった形の口髭を生やした、背の低い、太った茶褐色の肌の男は、頭から垂らした白い布を環で止め、膨らんだ白いパンツを履いていた。
東方の地域によくある格好であった。
「チョウさんは、東方の出身か？　」
案内人（ガイド）に、親し気な少年口調で、白い甲冑のマリスが尋ねた。

「おお、いかにもそうアルよ！　坊ちゃん、なんでわかったアルか！？　」
　太ったガイドの男は、自分のダグラの上で、うれしそうに、ちょっとだけ跳ねた。
「その衣装は、東方特有のものだろう？　出身は？　」
「タイラ国アルよ。東洋の大国ラータン・マオの近くの国、そこのコウガ・リョン・シティーアルよ」
　ラータン・マオとは、ヴァルドリューズが宮廷魔道士を勤めていた国である。
「ふ～ん、東方の国の名前までは、よく知らないや」
　ヴァルドリューズは訳ありでラータンを出て来ているのは、一行の皆が知っていた。マリスが、念のため、あえてとぼけたのは、皆にも通じている。
「お客さんたち、どこへ行くネ？　」
　チョウは、人のいい笑顔で尋ねる。
「魔物を退治しにきたのさ。この辺で魔物が出たっていう噂を聞かなかったか？　」
「お客さんたち、魔物を退治して回ってルか？　なんで、そんなことしてるアルか？　」
　チョウが、眉間に皺を刻んでいる。
「賞金稼ぎだよ。オレたちは、魔物を倒して賞金を頂くために、諸国を旅して、こんなところにまで来ているのさ」
　マリスは、にっこり笑い、スーたちの情報から、この辺りでは最も無難な賞金稼ぎを咄嗟に繕った。
「アイヤー！　賞金稼ぎの人たちだったアルか！？　それで、魔物を探してたアル

か！？　ああ、納得いったアル！　」
　チョウは、ぽんと手を打った。
「諸国を旅して来られたなら、ちょっと聞きたいアルが、……実は、これ、内緒アルけど……」
　チョウは、何か重大な秘密を打ち明けるような、深刻な表情になった。
「キャラバンに通達されたアルよ。なんでも、ある国からの要請で、二人組の男女を探しているらしいアルよ」
「へえ、なんなんだい？　それって」
　カイルが相槌を打つ。
「その二人っていうのは、ひとりはまだ若い少女の兵士で、もうひとりも若い男の魔道士だというアルよ」
　一行の背筋に、緊張が走った。
「へえ、その二人は、魔物を倒してまわってるのかい？　てことは、オレたちと同業の奴等ってわけか」
　カイルが、うんうん頷く。マリスに話を合わせていることがわかる。
「賞金稼ぎとは違うらしいアルよ。二人は、ある野望を達成しようとしているらしいアル。なんだか、とても恐ろしい邪神を呼び出して操り、この世を征服しようとしているらしいアル！　」
（『サンダガー』のことだろうか……？　）
　ケインは、ちらっとマリスの横顔を見る。
「ええっ！？　邪神を呼び出して、世界征服だって！？　」
　カイルが驚き、ダグラから落ちそうになった。

その反応に、チョウは、満足そうに話を続けた。
「その国の政府は、二人を生かして捕えるのだと、あらゆる国々にお触れを出した
そうアル。だけど、二人の足取りは、どういうわけか、ある小さな村で、ぱったりと
途切れてしまったようアルよ」
そこで、チョウは、一行の顔を見回す。
「お客さんたち、そんな噂を聞いたことはないかね？」
「さあな。俺たち、魔物の情報なら気にしてたけど、そんな話は聞かなかったし
なー。マリユス、お前どうだ？」
カイルが、マリスに振った。打ち合わせなどはしていなかったが、咄嗟に少年騎士
の偽名を使う。
「さあ、……オレも聞かなかったな」マリスも、首を傾げてみせてから、答える。
「悪いな、おっちゃん。力になれなくて。それよりも、魔物はこの辺りには出ないの
か？　この砂漠を越えた辺りはどうだ？」
カイルが何気なく、ガイドに尋ねた。
「そうアルなー、魔物というか、この辺りには、夜になると、砂漠で命を落として
いった者の死霊が出ると言われているアルよ。この先にオアシスあるが、そこで新し
いガイドさんいるアルから、その人に聞いてみるよろし」
チョウはがっかりしたように、肩を落とした。
「あんたが、背格好もその少女兵に似とるアルが、聞いていた甲冑とは違うし、男で
は、全然違うアルな」
マリスを見ながら、ぶつぶつと、チョウが言う。

「オレもたまに、女に間違われるけどさ、これでも正真正銘の男なんだ。オレたちは、魔物退治の『白い騎士団』だ。ずっとこのメンバーで旅を続けてるけど、そんな二人組は見たことなかったよ。悪いな、チョウさん」

マリスは、悪そうに笑いかけた。

「あのガイドの言うことは、おかしいわ」

辺りは、夜になりかけていた。

マリスとケインは、皆が休んでいるところから少し離れた場所で、特訓していた。

昼間の時とは違い、ケインもたまに攻撃する。その特訓の最中に、マリスが、彼にだけ聞こえるように、言っていた。

「あたしは、情報収集の時に、必ず、あたしとヴァルのことが噂になっていないかどうかも、確かめてきたわ」

彼女が祖国の追手を警戒していることは、聞かされている。

マリスの右拳がケインの頬を掠めたが、ケインもそれを避けながら、拳を繰り出す。

彼の蹴りを、軽く飛んで躱(かわ)すと、彼女は再び口を開いた。

「邪神がどうのって言ってたけど、それが一番引っかかったわ。だって、あたし達は、人前で『サンダガー』を呼び出したことは、ほとんどないのよ。それに、『あの国』は、『サンダガー』どころか、あたしとヴァルが出会ったことすら、知るわけないんだから！」

シュッと向かって来たマリスの拳を、ケインが手の甲で受け止める。

「『あの人たち』は、あくまでも、あたしだけが目的のはず。二人を、雁首揃えて
生け捕れ、なんて言うはずないわ！　各国に触れを出したとも言ってたけど、アト
レ・シティーでだって、そんな話耳にしなかったし。だから、あのガイドは、ウソの
情報を掴まされたか、もしくは……」
マリスは、最後まで言うことはできなかった。
クレアとチョウの悲鳴が、打ち切ったのだ！

刺客（1）（後書き）

今時いないアルアルキャラ……

刺客（2）

「ひえーっ！　死霊アルよー！」
ガイドの男チョウが、頭を抱えて伏せている。
空には、無数の白いふわふわしたものが浮かんでいた。
よく見ると、それは、生気のない人間の顔であったり、ウマやダグラ、その他には、
大型動物から小動物まで、いろいろな姿形があった。
噂通り、砂漠で死んでいったものたちの死霊なのだろう。
ケインの手が、マスターソードに伸びるが、マリスもロングブレードに手をかけた
まま、まだ抜こうとはしない。
『彼ら』が襲ってくるような気配は、今のところなく、ふわふわと揺れながら、た
だ空中を漂っているのであった。
「『この人たち』は、成仏できなかった人たちなんだわ！」
顔を伏せていたクレアは立ち上がり、空を見上げて、語りかけた。
「どうしたのです？　あなたたちは、何を訴えたいのです？　良かったら、私に話し
てごらんなさい」
クレアが片方の手を差し延べて、霊たちに問いかける。
「……ええ、……ええ、……まあ！　そんなことが！」
ケインたちには、何が起きているのか、よくわからなかったが、クレアは親身にな
って、頷いている。巫女だった経験を生かして、幽霊たちと交信を試みているらしか
った。
「大昔、ここで起こった大洪水によって、亡くなったという方が大半だわ。後は、や

はり、砂漠の厳しさに付いていけずに……ああ！　なんて可哀相！
」
クレアは、両手で顔を覆い、泣き出した。カイルがその横に並び、肩を抱いたが、
それには気が付かないまま、スッと彼女は顔を上げた。
「わかりました。私に任せてください。白魔法の究極奥義で、あなた方を救って差し
上げるわ！　」
祈るように両手を組み合わせ、目を閉じ、呪文を唱え始める。
途端に、白い幽霊たちは、ざわめき、一斉にクレアに襲いかかっていったのだっ
た！
「クレア！　」
駆け出そうとするケインとマリスを、ヴァルドリューズが手で制した。
「究極奥義の魔法の時は、呪文を唱えると同時に、術者は結界で守られる」
その言葉通り、クレアの周りには、薄く白い膜のようなものが出来ていて、霊たち
は、それ以上、彼女に近寄ることは出来なかった。
――が
「おーい！　俺はどうなるんだよー！　」
クレアの隣にいたカイルが、魔法剣を抜いて、襲いかかる死霊たちを、ばさばさ切
り裂いていくが、霊たちは、切られても、切られても、すぐに切り口同士がくっつき、
復活していた。
カイルを援護しに、ケインとマリスが向かう。
マスターソードで死霊たちを切り裂くが、やはりすぐにつながってしまう上に、ケ

インは、なんとなく、『キレが悪い』気がした。
いつもの魔物とは勝手が違うようで、剣の中のダーク・ドラゴンも食わないように
感じる。
「クレア、まだかよ！？」
カイルが振り返るが、まだ呪文は唱え終わらない。
「えーい、面倒だ！　サイバー・ウェイブ！」
久々に、カイルが魔法剣の魔法を発した。
剣から吹き出す銀色の霊気が、死霊たちを両断する！
その霊気が通った後だけ、白い霊たちは、きれいに消えていた。
「そうか！　カイルの技も『浄化』だから、死霊に効いたんだ！」
マスターソードで霊たちを切り裂きながら、ケインは言った。
「そっか！　じゃあ、もういっちょいくぜ！　サイバー・ウェイブ！」
銀色のうねりは、ぎゅるぎゅると死霊たちを消していく。
それにまかせて、ケインとマリスは、離れて見ていた。

その時、クレアの瞳が、パチッと開いた。
「長らくさまよい、たゆたいしものたちよ。今こそ、永遠の安らぎに、その身を委ねよ！」
彼女の大きく開かれた両手からは、白い炎が発射された！

ぐぉぉぉおおおおおお！
ごわあああぁぁぁぁあああああ！

勢いよく天に伸びていく白い炎に巻かれた霊たちは、恐ろしい、
まるで断末魔の
叫び声のような音を発して、消滅していく。
「良かった！　ちゃんと成仏していってるわ！」

クレアは、涙にぬれた頬も乾き切らずに、微笑む。
「さあ、あなたたちも成仏よ！　」
また別の方向に向かって両手を翳す。
ぐぎゃあああぁぁぁぁあああぉぉおおお！
やはり、悲鳴のような、叫び声のような音が発せられている。
「はい、成仏！　」
がああああぁぁぁぁぁああああ！
ごほおおおぉぉぉぉぉおおおお！
「ああ、皆さん、喜んでらっしゃる！　良かった！　」
クレアが、美しい笑顔で空を見上げる。
霊たちは苦しそうな声を上げ、『成仏』というより、『消滅』していってるように、
クレア以外には思えた。
死霊は、続々と消えていった。
カイルも、いつの間にか引き下がり、ケインたちと並び、ぽかんと口を開けて、
その様子に見入っている。
シャーッ！　と数匹の霊たちが、クレアの後ろに回った！
「はいはい、慌てないで。順番よ」
彼女の放った白い炎が、その霊たちを包み込む――というより、当てられた。
そして、やはり、『彼ら』は、悲惨な絶叫を残して消えてゆく。
今や、死霊たちは、残すところ、僅かになってしまった。
「アイヤー！　お嬢さん、巫女さんだったアルか！？　」
すべての霊がやられ――もとい、成仏した後、案内人チョウが、ビックリして目を

パチクリしていた。
「これで、砂漠に現れる死霊はいなくなりましたわ。これからは、皆さん、ご安心し
てここを通られると思います」
クレアが、にこやかに笑顔で言った。
「これなら、安心して眠れるアルな！　いやあ、良かったアル！」
チョウは、何度もクレアに頭を下げた後、寝袋を取り出し、砂地に敷いて、さっそく中に包まった。
一行も、いつもの寝袋に、それぞれ入り込んだ。

「ケイン」
強くゆさぶられ、ケインがうっすら目を開くと、カイルであった。
「どうした？　」
「シッ。妙な感じがする。ここから離れた方がいい……！　」
押し殺した声でカイルが言い、魔法剣を見せた。
彼の魔法剣には、災いを予知する能力がある。その魔法剣の知らせによるものであった。
「みんなは？　マリスたちは……」
もぞもぞと、寝袋の中で、簡単に身支度をしながら、ケインが小声で聞く。
「ヴァルとミュミュはいない。あのガイドのおっちゃんもいなくなってる。俺は、マリスとクレアを起こしてくる」
カイルは、すぐ後ろで寝ている二人の方へ行く。
ケインは身体を起こし、真っ暗な周りの様子に気を配る。
なんとなく、空気が生暖かいような、変な感じがした。
その時、闇の中には、いくつもの光るもの――目のようなものが

一斉に浮かび
上がったのだった。
「魔物だ！　」
後ろにいるカイルたちに向かい、ケインが叫んだ。

飛んで来たカイル、クレア、マリスとケインは、背中合わせに固まった。
「ひゃひゃひゃひゃひゃ！　」
声のする方を見上げると、黒いフード付きマントを被った、茶褐色の肌の太った男
が、空から舞い降りてきた！
「……やっぱり、てめえだったか！　」
カイルが舌打ちした。
下りて来たのは、案内人のチョウだった！
「ワタシ、タイラ国の魔道士チョウだったアルよ！　」
チョウは、ふわふわ飛びながら言った。
「ラータン・マオのあの魔道士、偵察に行ったネ。彼は手強い。ラータンでも有名な
宮廷魔道士だったアルよ。ワタシ、ベアトリクスから聞いた。お前の首、賞金かかっ
てる。だから、彼のいない間、お前、捕えて、ベアトリクスに引き渡すアルよ！　」
ふぉっふぉっと、チョウが笑う。
「ふん、バレてちゃあ、しょうがないわね。わざわざ下手な芝居なんか、するんじゃ
なかったわ」
マリスが、不適な笑いを向ける。
「できるもんなら、やってみなさい！　」
マリスが、ずいっと進み出て、ロングブレードを引き抜いた。
チョウは、空中から、一本の杖（ロッド）を取り出すと、それを彼らの方へ

傾けると
同時に、そこにいた光る眼のモンスターたちが、一斉に姿を現し、彼らに向かって、
飛びかかって来たのだった。
それらは、既に見慣れた獣人タイプのモンスターだ。
剣を持った三人は、ばさばさと切り裂いて行き、クレアも得意の炎の術を発射させようと、両手を翳すが――
ポッ
彼女のてのひらからは、小さな炎しか出ず、すぐに消えてしまった。
「ひゃひゃひゃひゃ！　そのお嬢ちゃんは、さっきの究極奥義で、魔力を使い果たしてしまったアルよ！」
クレアは、はっとして魔道士を見上げた。
「もしかして、あの死霊は、あなたが集めてきたのでは……！？」
「その通りアル！　本当は、あのラータンの魔道士の魔力を削り取ろうと思ったアルが、巫女のお嬢ちゃんが一緒だったとは、ワタシも計算違いだったアルよ！
だけど、こうやって、いかにも計算通りのように、コトが運んでいるアル！
良かったアルよ！」
チョウは、手を叩いて、おどけてみせた。
「尊い霊たちを思いのままに操り、踏み躙(にじ)るなんて、許せないわ！
あなた、
覚悟なさい！」
クレアが怒りを露に、人差し指をチョウに差し向けた。
「魔力のほとんどないあんたが、どうやってワタシと戦うね？　ひょひょひょひょ！」

チョウが片手で腹を押さえて、笑う。
クレアは、実戦ではあまり抜いたことのない、マリスにもらった剣を、ゆっくりと
鞘から引き抜き、構えた。
「ベアトリクスの名前が出たからには、あんたの好きにはさせないわ！　」
マリスが、ダッシュし、チョウに剣を振り下ろす。チョウの杖が、それを受け止め
た。
「ケイン、カイル！　クレアを援護して！　」
マリスが剣を魔道士に打ち下ろし、振り返らずに叫ぶ。
ケインは、クレアの盾代わりにと、バスターブレードを地面に突き刺した。クレア
は、なんとか戦う。その両脇を、ケインとカイルで固め、モンスターたちに応戦して
いった。
「いい長剣（ロングブレード）アルね。ラータンの魔道士が魔力を吹き込んだアルか？　」
チョウは、ひゃっひゃっと笑い声を上げる。
「ベアトリクスでは、今、血眼になってお前を探しているそうアルよ。他にも、お前
を捜しているものは多いと聞くアル。一体、何をしでかしたアルか？　」
チョウは、てのひらから電光を、マリスに向かい発射した！
それを、彼女のロングブレードが防ぐ。
チョウの電光術は素早く、威力もあるようで、マリスの剣に弾き返された後も、
勢いよく飛び散って行ったのだった。
その様子からは、チョウは、意外にも、腕が立つらしいことが伺える。

ふいに、マリスが、飛び退き、キッと睨んだ。
「あんた、わざと、あたしの剣狙ってるでしょう？　」
チョウは笑った。
「ふぉっふぉっ、わかってしまったアルか！　だが、もう一息ネ！　」
そう言って彼が放ったのは、両手で抱えるほどの大きな岩の塊だった。
はっと、マリスが剣で防御したが、剣に接触したところから緑色の電光が走り、
マリスの剣は軋みを立てて、割れたのだった！
その衝撃で、彼女の身体が吹き飛ぶ。
「マリス！　」
ケインたちが、一斉に、マリスを振り返る。
「ひゃひゃひゃひゃひゃ！　」
ゆっくりと、太った魔道士の姿が、地面に降り立った。それを、片膝をついた
マリスが、睨みつけた。
「あんた、『メテオ』の術を――！　」
それは、彼らも今まで目にしたことのない技であった。
「いかにもアル。そこらへんの魔道士たちには、ちょっとできない技アルよ」
チョウは得意そうに笑い、マリスに近付いていく。
「あれは、この地上の、どの石とも違う物質でできてる石アル。それを、別次元から
取り出したアル。多少の魔力は効かないアルよ！　」
ケインは、ちらっと思った。
（別次元の石というと、……マスターソードの魔石と同じように、魔力を封じ込める
ような……？　）

チョウは、両手を上に向け、呪文を唱え始めた。
すると、先程の『メテオ』と同じような、だが透明の岩が現れたのだった。
「お嬢さんは、魔力が強過ぎるアルからな。この中に入れて運ぶアル。これなら、
あんたの発する魔力を辿って、あの魔道士がワタシ追ってくるの、ちょっと難しく
なるアルよ。さあ、くるアル！」
チョウが、マリスの腕を掴む前に、ケインが駆け出していたが、それを待つまでも
なく、マリスがチョウをぶん投げ、素早く馬乗りになった。
「このあたしを捕まえようなんて、百年早いのよ！」
マリスは、チョウの腕を背中に回し、締め付け、後ろから首を脚で固めて、押さえ
つけていた。
「アイヤー！　痛いアルよ！」
苦しそうに、チョウは悲鳴を上げる。
駆け出したケインは、すべって転んでいた。それを、カイルが目を点にして見てい
た。
「よくも、あたしの大事な剣を折ってくれたわね！？　このちびブタ！　覚悟しなさ
い！　首をへし折ってやるから！」
（ひゃーっ！）ケイン、カイル、クレアが、心の悲鳴を上げた。
「痛い、痛い！　やめるアルよー！」チョウが泣きそうな声を上げた。
「なによ、こんな岩！」
マリスは、宙に浮かんでいる透明の岩に、右拳をくらわせ、ぶち壊した。
岩は、ガラス玉のように、こなごなに砕け散ってしまった。

それを間近で見たチョウは、驚きと恐怖の悲鳴を上げていた。
「どうやら、あたしの魔力は、あんな岩ごときじゃあ吸収出来ないみたいね。お生憎
（あいにく）さま！　」
「アイヤーッ！　」
マリスの高らかな笑い声に、チョウは再び悲鳴を上げる。
「あんた、ベアトリクスのなんなの？　タイラとあの国は国交なんてなかったはずよ。
ああ、その前に、あそこの獣人モンスタたち、引っ込めてちょうだい」
マリスに首と腕を押さえつけられ、苦しそうな呻き声を上げながら、チョウは短い
呪文を唱える。すると、今までカイルたちが切っていた獣人モンスターたちは、忽然
（こつぜん）といなくなった。
「それでいいわ。さあ、吐いてもらうわよ。あんたが、なんでベアトリクスと関係
あんのか」
首を押さえつけていた脚を余計に絡み付けて、マリスは言った。
「アイヤッ、アイヤーッ！　ワタシ、ベアトリクスの宮廷魔道士のひとりとトモダチ
アルよー！　」
チョウは、ほとんど泣き叫んでいた。
「ベアトリクスは魔道士団と騎士団に分けて、本格的にお前を捜すことにしたアルよ！
ワタシ、トモダチに頼まれただけアル！　」
ぎりぎりとマリスに腕を締め付けられ、なおも悲鳴を上げる。
「それだけじゃあ、納得のいかないことがあるのよ。あんた、あたしとヴァルが、
邪神を呼び出してどうのこうのって、言ってたわね？　ベアトリク

スが、そんなこと
言うわけないのは、わかってるんだからね！　あれは、どういうこ
となのよ！」
「ひゃあっ！　痛いアル！　あ、あれは、ある時、ワタシのトモダ
チに妙な触れ込み
があったと聞いたアルよ！　お前が、あの魔道士と組んで、邪神を
召喚してるって！
ワタシ、それをそのまま言っただけよ！　ほんとは、よく知らなか
ったアルよ！」
　マリスの目が、ぎらっと光る。
「その、タレ込んだヤツって、誰？」
「知らないアル！　そこまでは、知らないアルよ！　ほんとアルよ
ー！」
　マリスが、チョウを突き放して転がした。チョウは、呻き声を上
げながら、腕をさ
すり、上半身を起こした。
「情報を流したのは、多分、『蒼い大魔道士』の一派だわ。あたし
を追っているベア
トリクスの魔道士団の中には、ヤツの息のかかった者も、紛れ込ん
でいるでしょうね」
　マリスが、冷静な表情で呟く。
「『蒼い大魔道士』！　またあいつか！？」
　マリスは、そう言ったケインに頷いてみせた。
「あいつは、ベアトリクスを付け狙っている。あの国に、協力する
よう見せかけて、
いずれ自分のものにしようと企んでるに違いないわ。なんとなく、
以前、じいちゃん
から聞いた気がする」
「じゃあ、ベアトリクスの魔道士団て……結構、手強いんじゃ……
？　あそこは、

騎士たちだって、凄腕が集まってるって聞くし……」
ケインの言ったことに、クレアが心配そうに、両手を組み合わせる。カイルも、
いつになく真面目な顔になっている。
チョウが、こそこそと逃げ出す体勢になっていたが、
「アイヤーッ！」
マリスが彼の胸ぐらを引っ掴んだ。
彼女の面は、いつもの自信に満ちた、あの不適な笑顔だった！
「ベアトリクスの騎士団に魔道士団――上等じゃないの！　あのクソ女王陛下に伝えるがいいわ！　『捕まえられるもんなら、捕まえてみろ！』って。あたしは、いつでも、受けて立ってやるってね！」
そう言ってチョウを放り出すと、マリスは、両手を腰に当てて、高笑いした。
その様子は、出会ったばかりの女剣士スーというよりも、それこそマリスの操る
『獣神サンダガー』に、そっくりであった。
「アホかーっ！　宣戦布告してどうする！？　なんで、お前は、わざわざ自分から厄介事を招き寄せるんだ！？」
喚いているケインに、彼女は、けろっとした視線を向ける。
「あら、敵が多ければ、それだけ暴れられるじゃない？　敵なら手加減することもなく、やっつけられるもの。それなら、あたしの暴れたい衝動も解決するし、ケインにばかり負担かけないで済むじゃない？」
「こ、この減らず口……！」と、呆れるケイン。
いつの間にか、魔道士チョウが消えていたが、一行にはそれどころではなかった。

「ヴァルドリューズさん！　」
そのクレアの声で、カイル、ケイン、マリスは振り向いた。
そこには、ミュミュを肩に乗せて、いつの間にか、ヴァルドリューズが静かに
立っていた。
皆を見回してから、ヴァルドリューズが口を開く。
「次元の穴の場所は、だいたいわかった。そして、この砂漠を越えたところに、村が
あった」
「村だって！？　やったー！　これで、やっと人間らしい生活ができるぜーっ！　」
カイルが大喜びして、小躍りする。
辺りは、もう明け方に近く、薄明るい。
一行は、このまま出発することになった。

「お前、チョウの正体に気付いてたんじゃないのか？　」
ウマに乗る前に、ケインはヴァルドリューズに、こっそり尋ねる。
「私が姿を消せば、奴は本性を現すと思っていた」
普段通りの、抑揚のない口調で、ヴァルドリューズは答えた。
「俺たちが戦っていたのも、見てたのか？　」
ヴァルドリューズは、頷いた。
「マリスが危なくなったら、出ていこうと思っていた。私にも、彼女の『素の力』
――『サンダガー』を召喚していない時の普段の力――を知る必要
があるのだ。だが、
彼女は、以前よりも力を増しているような気がする」
「そうなのか……」
ケインは、少し考えてから、彼を見上げた。
「……あのさあ、マリス見てて、ちょっと気になったんだけど、…

…『サンダガー』
を召喚するようになってから、伝説のゴールド・メタル・ビースト
みたいに、食欲が
旺盛にはなるし、暴れてないと気が済まなくなったって聞いたけど、
サンダガーは別
次元から呼び出して、彼女に乗り移らせてるだけなんだろ？　だっ
たら、普段の彼女
は、なんともないはずじゃないのかな？　」
ヴァルドリューズの瞳が僅かに光った。
確認するように、ケインは、もう一度、見つめ直した。
しばらくしてから、ヴァルドリューズが、重々しく口を開く。
「お前もそう思ったか……。私も、以前から、そのことは、不審に
思っていたのだが、
『サンダガー』の召喚に関することを探ろうとすると、なぜか、魔
神『グルーヌ・
ルー』が拒んでしまうのだ。だが、いずれ調べてみるつもりだ。も
しかすると……」
ヴァルドリューズは、その続きを口にするのさえも、躊躇（ためら）ってい
るようだ
った。
その代わりに、彼が口にした言葉は――
「お前は、彼女の教育係に向いているのかも知れんな」
彼は珍しく、ちょっとだけ微笑むと、ケインの肩に、ぽんと手を
置いたのだった。
「これからも頼む」とでもいうように。
「……ヴァル、お前も、きっと、マリスには手を焼いてきたんだろ
うな。同情するよ」
ヴァルドリューズに同情しながらも、なんだか、厄介事を押し付
けられたような気
もしたケインであった。

刺客（2）（後書き）

アルアルキャラ、忘れた頃にまた出て来るかも？？

砂漠の生き物（1）

「なあ、今日で何日経つ？　」
カイルが誰にともなく尋ねた。
ベアトリクスの追手のひとり、タイラ国の魔道士が消えてから、三日が経つ。荒野の次は砂漠かと、代わり映えのしない景色の中を進むのに、ほとほとうんざりしているのは、皆も同じだった。
「本当に、こっちでいいんだろうな？　」
カイルは、今度はヴァルドリューズを振り返り、疑い深気な目を向ける。ヴァルドリューズは、ダグラの上で、ゆっくり頷いた。
「けっ！　あの変な魔道士野郎のおかげで、とんだ道草食っちまったぜ！　」
カイルはぶつぶつ言うが、例のガイドの振りをした魔道士チョウは、実際は、半日ほどしか同行しなかったので、遠回りさせられたとしても、その分は、もう取り返していた。
「大分、日が高くなってきたな」
「そうね」
真っ青な広がる空を、眩しそうに見上げて言ったケインに、マリスが相槌を打つ。
このところ、早朝のまだ薄暗いうちに出発するようになっていた。白い、大きな布を被り、金色の環で頭に固定したスタイルも、定着してきている。
ミュミュが、ぱたぱた飛んで、マリスに近寄るが、話しかけるでもなく、ただマリ

スの目につくところを、ずっとぐるぐる飛び回っている。
「ミュミュ、おなか空いたの？」
マリスが言うと、ミュミュは、さっとケインの影に隠れ、彼の肩越しから、そうっと顔を覗かせた。
「いいわ、ゴハンにしましょう」
マリスが合図し、ダグラから降りた一行は、敷物用の絨毯を敷き、その上に座る。
砂漠に入る前に購入した食料も、いよいよ底をついてきていた。
それは、一行の誰もが経験したのことのない気温であった。これから、真昼になれば、息も付けないほどの暑さにまで上昇する。衣服等は、脱ぎ捨てたくなるが、砂漠での日を、長時間、直接肌に浴びれば、皮膚が焦げ、そこから病気が発生することもあるというので、日除けの布で全身を覆うようになるのだった。
「食い物らしいもんは、これで終わりか。あ～あ」
嘆きながら、カイルは、干した肉や果実を名残惜しそうに、いつまでもしゃぶっていた。
マリスも、ちょっと残念そうな顔をしている。

そこには、今まで進んで来た砂漠と違い、奇妙なものたちがいた。
刺々しい葉を持つ、木全体が緑色そして、その先に毒々しい真っ赤な大輪の花をつけたものが、てんてんと砂地から突き出ている。町中で見かけるより大きめのムシが、花の前を通り過ぎようとすると、その赤い花弁（はなびら）がパクつき、瞬時にして、くしゅっと窄（つぼ）まった。

もごもごとまるで咀嚼(そしゃく)しているのように、しばらく動いていたかと思う
と、そのうち、ゆっくりと、また花弁がひらいていく。
ムシは、跡形もなくなっている。
(どうやら、食虫植物らしいな)
ケインが、ふと見ると、少し離れたところの岩の上を、指ほどの太さの、長いムシ
が、身体を縮めたり、伸ばしたりして、這って行くのが見えた。枯れた木のように茶
色く、ぼしょぼしょと毛を生やしている。
ミュミュが、ぽたぽたと、それに寄って行く。
「トーガだわ。ミュミュ、そいつに、あんまり近付かない方がいいわよ」
マリスが、首だけミュミュを振り返って、言った。
「放っておけば危害は加えないわ。敵だと思われると、攻撃されちゃうわよ」
マリスの声に、ミュミュがそこからパッと飛び退(の)く。
「お前って、変なことに詳しいな」
マリスは、ケインを振り返り、微笑した。
「じいちゃんのところでみたことがあるの。現地で実物を見たのは初めてよ」
大魔道士ゴールダヌスを、マリスはそう呼ぶ。魔道士連中を警戒するため、結界を
張っていないところでは、マリスもヴァルドリューズも、その名をあまり口にしない。
ミュミュは好奇心に目を輝かせ、先程の食虫植物の葉のトゲのない部分を持つと、
ぶつっと引っこ抜いた。
それを、そうっと運び、トーガというムシの上に、ぼたっと落としたのだった。

途端に、茶色く曲がった紐のようなそのムシは跳ね上がって、反っくり返ると、身
体を覆っている毛を逆立てて、硬質化させ、落ちて来た葉に向かって、それらを発射
させたのだった！
針のように鋭く尖った毛は、ぶすぶすと葉に刺さった。
その様子を見届けると、ミュミュは満足して、ヴァルドリューズのところへと戻っ
て行った。ムシが攻撃するところを、どうしても見たかったようだ。
「うわあっ！　なんだ、ありゃあ！？　」
「きゃああ！　」
カイルとクレアの叫び声だった。大きな、黒い半透明の物が、ぶにょぶにょと、
ゆっくり地面を這っているのが、マリスとケインにも見えた。
「ああ、それはイグウィナだわ。おとなしい生き物だから、大丈夫よ」
マリスが立ち上がって近付き、両手で持ち上げるようにして抱えてみせた。
丸いのか、四角いのか――イグウィナは、軟体動物で、マリスに抱えられると、
ぐにゃ～っと、地面に伸びて、垂れた。黒くても、半透明の身体を通して、向こう側
のマリスの脚が透けて見えている。
「きゃああ！　やめてー！　」
クレアが、両手を顔に当て、悲鳴を上げた。
「大丈夫よ、何もしないから」
「いやあー！　」
マリスがイグウィナを持って近付くと、クレアは一層怖がり、カイルの方へよろめ
いた。

カイルが目一杯優し気な表情で、両手を開き、彼女を受け入れる体勢になっていた
のだが、クレアは、カイルを突き飛ばして、その場から逃げた。そこに、彼がいたこ
とすら、気付いていなかった。
「こっちにもいたよー」
別のところから、ミュミュが小さめのイグウィナを抱えて、飛んでくる。
「きゃーっ！」
クレアはその場にへなへなと崩れて座り込み、顔を覆ってしまった。
「わーい！　おもしろーい！」
ミュミュは、マリスの持っていたイグウィナの上でぼんぼんバウンドし、大喜びだ
った。ミュミュの持って来た小さい方のイグウィナは、マリスがてのひらの上で、弾
ませて遊んでいる。

ダグラに乗り、出発すると、透明の花弁のようなものが、ひらひらと飛んできてい
た。よく見ると、それは一定の形に留まらず、常に変形しながら、飛び続けていた！
イグウィナと同じく基本形はないようだ。
「これは？」
「ジェイド。夜になると、綺麗な翡翠(ひすい)色に光るの。害はないけど、触るとベ
タベタするから、気を付けた方がいいかも」
ケインにマリスが答える。
「ああ～ん！」
言われた側から、ミュミュが悲鳴を上げる。ミュミュは、顔にへ

ばりついたジェイ
ドを取っ払おうと、必死にもがく。
　クレアも、彼女の美しい黒髪の先に引っ付かれ、やはり悲鳴を上げながら追い払っ
ている。
　ミュミュが、やっとのことで剥がしたジェイドを、丸めて放り投げた。それが、
カイルとクレアの乗っているダグラの尾にペトッとくっつき、ダグラが驚き、勢い
よく尾を振って暴れたため、クレアが悲鳴を上げてダグラの首に捕まり、危うく
カイルが振り落とされそうになった。
　ダグラたちにも、ジェイドは鬱陶(うっとう)しいらしく、なんとなく、しかめっ面
をしているように見える。
「ジェイドは火を恐れるのよ。松明(たいまつ)でも掲げてれば大丈夫」
「……早く言ってくれよ」と、マリスに言うカイル。
　さっそくクレアが炎の術を唱えた。てのひらほどの炎を、掬(すく)うよ
うに浮かび
上がらせた途端に、周りから、その透明な生き物は消え去った。
　ケインとマリス、ヴァルドリューズのダグラの周りにも、彼が小
さな炎を飛ばし、
それが飛びながらついてくるので、ジェイドは寄り付かなかった。
　まだ昼間ではあったが、火を焚いて砂漠を進むことになったのだ
った。
「今までは、こんな生き物には遭わなかったわ。それなのに、どう
して急に現れるよ
うになったのかしら？」
　クレアが不安そうに呟く。
「生き物がいるってことは……そうか！」カイルの瞳が輝き出す。

「そう。大分、砂漠の内部に入って来たってことと、『水が近い』ってことよ」
マリスが皆を見回して、微笑みかけた。
「そうか、オアシスがあるのか！　」
一行は、急に元気が漲（みなぎ）ってきた。
気の遠くなるような暑い日差しを受け、三日間歩み続けてきたが、とうとう目印であるオアシスが、もう目の前に迫っているのだ！　オアシスに付けば水を追加でき、浴びることも出来るだろう。
「よーし、みんな、後もうちょっとだ！　頑張ろーぜー！　」
カイルが、元気よく拳を掲げた。皆も、その気になり、笑顔になった。

「なあ、まだオアシスは見えて来ないのか？　」
辺りは日が沈みかけ、夕方であった。カイルがうなだれてマリスに尋ねた。
「……そうねえ」
マリスも、珍しく自信がなさそうだ。
ミュミュが疲れて、だらだらと飛んできた。マリスの周りを、またうろうろし始める。
「どうしたの、ミュミュ？　おなか空いたの？　」
そう言いながらマリスが休憩の合図を送り、一行はダグラの足を止める。大分、日が陰っていて、敷物がなくても砂の上は、それほど熱くはなくなっていた。
だが、砂だらけになるのを避けるため、皆は敷物の上に座る。
仕入れた食料は、昼間のうちになくなっていたので、再びバヤジッドの飴の袋を、

マリスは取り出した。
「……！」
珍しく、マリスが固まっていた。
「どうした？」
ケインが、袋を覗き込もうとすると、マリスは茫然として呟いた。
「……飴が溶けてる……」
「へっ！？」
ヴァルドリューズ以外、彼らは皆一斉に皮の小袋の中を覗く。
飴は、袋の中で、どろどろの違う個体になっていた！
食料を購入してからは、一度も袋を開けなかったので、一体いつ溶けたのかはわからなかったが、尋常でない暑さの中では、当然であった。
「うわ～ん！」
ミュミュは、火がついたように泣き出した！　それに触発されたように、カイルもクレアも取り乱していた。
「食料もなく、どうやって、この先進んで行くんだよー！　ここに巣くってる変な物を食べて生き延びろっていうのか！？　そんなこと、このデリケートな俺に、できるわけないだろー！」
カイルが頭を抱えて、誰にともなく叫ぶ。
「ああ！　私たちは、こんなところで尽き果てなくちゃならないのかしら！　何という運命のいたずらかしら！　おお、神様！」
クレアも、膝を付き、祈るように、天に向かっている。マリスも、放心したように、ぺたんと座り込んだ。
「そ、そうだ！　みんな、安心しろ！　なくなったら、いつでもくれるって、バヤジ

ッドさんが言ってたじゃないか！」
ケインが立ち上がって、バヤジッドと交信出来る木のペンダントをポケットから取り出した。
皆の顔は、一瞬で輝く。
ケインが、さっそくロケットを開けると、そこには、茶色い木の幹に、赤く光る小さな二つの目の付いた、黒いフードを被った、見覚えのある懐かしい姿が描かれていた。
以前、開けた時と同じく、中の肖像画が、みるみるうちに、実写のバヤジッドへと移り変わっていった！
「皆さん、どうもこんにちは！　結構、頻繁に開けて下さって、私は嬉しいですよ！」
彼の、何重にも一緒に喋っている、ヒト離れした声が、懐かしく響く。
「ああ、バヤジッド！　助けてくれよぉ！」
カイルが泣きそうな、甘えた声を出した。
「はいはい、どうなさいました？」
ペンダントの中から、弾んだ声が返ってくる。
「あなたが作った、栄養分の詰まった飴ですけど、よかったら、あれをまた頂けないでしょうか？」
ケインは、丁寧に切り出してみた。満腹感が得られないなどとは、とても言ってはいられない。
「……ああ！　あの赤い飴のことですね！？　気に入って頂けましたか！？　そうですか、そうですか！」

表情は読み取れないが、声の感じから、彼は、喜んでいるようだった。
「あの飴は、製造に、ちょっと時間がかかるんですが、たまたま余ってるのが倉庫にあると思うんですよ。それでもよろしいですか？」
ヴァルドリューズ以外は一斉に身を乗り出してペンダントを見つめ、こくこく頷いた。
「わかりました。ちょっと探してみますね……」
肖像画を見ている限りでは、ジーッとしているだけにしか、皆には思えないのだが、
それでも、どうやら、彼は、倉庫の中を探しているようだった。
「ああ……！」
突然、歓喜に近い声が、ペンダントから起こった。
「どうした！？　見付かったか！？」
カイルが、ペンダントを持つケインの手に飛びつき、覗き込み、皆も、またしても身を乗り出す。
「いいえ、まだなんですけど、ちょっと思い出したことがあるんで、教えて差し上げようかと。この間、紅通りのドゥグにばったり遭っちゃったんですよ！　あのカエル魔道士の！　ヤツは、私の後をずっとついてきて、それはもう、鬱陶(うっとう)しいったら、ありゃあしなかったものですから、オオネズミを召喚してやりましたらね、これが、喜んで追っかけていったんですよ！　ほほほほほ！　ああ、おかしい！」
ケインたちは、へなへなと地面に崩れ落ち、ペンダントの中から聞こえる笑い声だ

けが、そのまま続いていた。
「……あのさあ、そんなことはいいから、……まだ飴は見付からないのか？」
力の入らない声で、ケインが尋ねると、
「ああ、ありました」呆気ないほどの平然とした声が、即座に返る。
「なにっ！？　本当か！？」
皆、一斉に顔を見合わせた。
「二〇粒くらいあるようですが、いいですか？」
木の魔道士の声に、皆の瞳は期待に輝く。
「助かったぜ！　じゃあ、それをこっちに送ってくれないか？」
「よろしいですよ。皆さん、今どちらにいらっしゃるのですか？」
「アストーレから西方面にある砂漠なんだ」
ケインの言葉を聞いた彼の表情が、一瞬曇ったように映った。
「具体的な位置がわからないと、転送は難しいですねえ……伝書バトでもいいですか？」
ハトというトリを召喚して、それに飴を届けさせようというのだった。
（おいおい、そんなんで大丈夫なのか？）
いやな予感が、ケインの脳裏をよぎる。
「……他に方法がないのなら、しょうがないけど……それだと、どれくらいで着くんだ？」
ケインの質問で、彼は、斜め上を見る。首を捻っているつもりなのだろうが、首が真っ直ぐなため、そのようになってしまうのだろう。
「そうですねえ……ここフェルディナンドから計算しますと……ざっと一週間くらいですかねえ……」

……パチッ

ケインの手は、ペンダントを閉じていた。
一行が、シ〜ンと静まりかえっている中、
「あらら？　どうしました？　もしもしー？　もしもしー？　……
変ですねえ。急に
通信が途絶えて……」
バヤジッドの声だけが、フェイドアウトしていったのだった。
「うわあああ〜ん！！」
ミュミュが、天を仰いで泣き叫ぶ。
それをきっかけに、カイルとクレアも再び取り乱す。
一行は、空腹と、心が折れて、この日はそれ以上進むことは出来なかった。

砂漠の生き物（2）

昼間は眠って体力を温存していた『白い騎士団』一行は、その日、よく眠ることが出来なかった。

暑い上に、遮るものの何もない地面で、寝袋に包まるのみである。

そして、いくら頭からすっぽり包まろうと、風で砂が当たる音がうるさかったり、細かい砂の侵入もあり、そして、突風が吹いた時には転がることすらあった。

気温差の激しい砂漠では、同じ一日とは思えないほどである。

日中は気温も上昇し、日差しも強過ぎるため、夕方から夜のうちに移動することにしたのだが、夜は一変し、一段と冷える。

強風が収まってきた時は、夜中であったが、一行は、のろのろと進み出した。

辺りは、相変わらずの砂地であったにもかかわらず、砂に出来た模様が、今まで見たものとは違い、波打ったような、筋のような模様が刻まれていた。

「なんだか、きれいだな……」

ケインが思わずぼそっと呟く。

「さっきまで風が強かったからね。そういう時には、こういう模様が出来るみたい」

ダグラの上で、マリスが答えた。

「なあ、今日で何日経つ？　」

夢うつつのカイルの呼びかけだった。彼は、このところ、そればかりであった。

食料が、まったく尽きてしまってから、丸二日が経っていた。

多めに買っておいたつもりの水も、残すところ、あと僅かだ。
ダグラの背でゆられているのでさえも辛くなり、彼らは、かろうじて、砂漠のような
過酷な環境でも生える、トゲのある、太い高い木々を見付け、背の低い草木を多少伐採
し、なんとかスペースを作ると、敷物も敷かずに、砂の中に、どっぷりとつかって休む。
「……まさか、このまま行き倒れ、なんてことには……」
茫然と座り込んでいるクレアが、ぼうっと呟いた。
「『白い騎士団』結成後、生死にかかわる初の大ピンチだぜ」
倒れ込んでいるカイルも、ぼそぼそと、悲しそうな声を出す。
「眠ろう。眠って飢えを凌ぐんだ」
ケインも、うつろな目で、皆を見回す。
クレアの隣では、普段通りに見えるヴァルドリューズが、瞑想の時のように足を組んで
座っており、彼の掌の上では、ミュミュが、へたっていた。飛ぶ力さえ、もう残っては
いないようだった。
ケインは、ふと隣で砂に埋もれているマリスに目をやった。空腹では、暴れることすら
出来ないらしく、さすがの彼女もおとなしい。
そのマリスが、突然、むっくりと身体を起こした。
すわった目のまま、遠くを見つめている。ケインが、同じ方向を、何気なく見てみる
と、砂の中で、何かが動いたのだった。
二人は、目を見張った。
砂の中のものは、その正体を露にした。
全長が、ヒトの子供くらいもある、黒やオレンジの混ざった皮の、オオトカゲであっ
た！

マリスは、それから目を離さずに、静かに、来ている白い鎧を脱ぎ始めた。俯せになっていたカイルが、ピクッと起き上がるが、彼女の鎧の下から現れた少年の服装を認めると、すぐにまた俯せた。

オオトカゲが、身体の両脇に生えた四本の足と、太い尾を使い、そこから遠ざかろうとしたその時、マリスが飛びかかった！

トカゲは驚き、急いで逃げ出す。マリスは、後を追いかけていった。動きの敏捷なトカゲを捕まえるのに、甲冑のままでは重いため、脱いでいたのかと、ケインには今わかった。

他の皆は、そんな彼女の行動にまでは気が回らないらしく、そのままの体勢で過ごしていた。

しばらくすると、トカゲの尻尾を片手で掴んだマリスが、生気を取り戻した笑顔で、砂だらけになって、戻ってきた。

「みんなっ！　食い物よ！」

「なっ！　なによ、それ！？」

何歩か引き下がったクレアの顔は、青ざめている。

「ガラガラオオトカゲよ。よく焼けば食べられるわ！」

マリスの瞳は、きらきらと輝いている。

「いやーっ！」

「ひえーっ！」

クレアとカイルがマリスから離れた時、

ボッ！

突然、ヴァルドリューズが、自分と皆との間に、火の術を放った。

何事かと、カイルと
クレアは、更に跳んで、その場から遠ざかった。
人の頭ほどもあるその炎は、地面に着くことなく、少し浮かんで燃えている。
「さすが！　話が早いじゃない？　」
マリスがヴァルドリューズに片目を瞑ってみせた。
彼の用意した火の上で、内蔵を抜き取ったトカゲの両端を、マリスとケインとで持ち、
ぐるぐる回しながら焼く。
火が通ったところで、ケインがバスターブレードでぶつ切りにしていく。
（うう、伝説の剣を、包丁代わりに使うことになるとは……！　）
よく中まで焼けていることを確かめてから、マリスは大きな塊を取り上げ、かぶりついた！
皆は、恐ろしいものでも見るように、目を見張る。
「なかなかいけるわ。みんなも食べたら？　魔物じゃないんだから、大丈夫よ」
にっこりと、マリスが言った。カイルもクレアも、まだ信じられないようで、トカゲに
手を伸ばそうとはしない。
だが、生きるためには、このまま何も口にしないわけにもいかず、このような得体の
知れないものでも、食べなくては――そう思ったケインは、勇気を出して、自分で切った
肉の塊に手を伸ばす。
「ここらへんが、おいしいんじゃないかしら」
マリスが、彼女の食べているのと近い部分の肉――トカゲの腹のあたりを指差した。
おそるおそる手に取り、かじってみる。オレンジと黒の混ざった

模様は、もう跡形も
なく黒く焦げていたが、細かいぶつぶつした皮膚の表面は、変わらずである。
　気持ちの悪い食感を想像していたケインだったが、よく焼けていたため、皮の部分は
パリッとしていて香ばしく、意外にも、美味しく思えたのだった。
　飢えていた彼は、肉の部分にも、がぶっと噛み付いた。
　中身は柔らかく、味はなかったが、食べれたものであった。
　ケインは、夢中で、がつがつ食べていた。
「ちょっと固めのトリ肉みたいでしょ？　」
　マリスが微笑んだ。
「確かに、そんな感じだな。味をつけてよく煮込めば、もっと美味しくなるような気がする」
　頬張りながら、ケインもコメントする。
　彼らのがつがつ食べている様を見て、少しは食べる気になったのか、クレアもカイルも、おそるおそる手を伸ばしていた。
　一口かじれば、後は、二人とも口も利かずに一心不乱で食べていた。
　マリスは、トカゲの頭までもたべようというのか、バスターブレードの先に刺して、
また焼き始めた。
（俺のバスターブレードが……）
　一瞬手を止めたケインであったが、仕方ないと諦めたのか、食べ続けた。
　ヴァルドリューズは膝の上で横たわっているミュミュに、食べ易く、トカゲの肉を細か
く裂いてから、彼女の口元へ運んでやっていた。その合間に、彼も、がっつくほどではな

かったが、少しずつ食べている。
ミュミュは、彼が差し出す肉の切れ端を、目を閉じたまま、小さな口をもごもごいわせて食べている。
何切れか食べると、弱っていたはずの彼女は、目をぱっちり開き、跳ね起きた。
彼の手から肉を受け取ると、両手で掴み、夢中で食べ始めた。「もっと、もっと！」
というように、食べては、すぐに両手を伸ばす。彼も、肉の塊を次々引き裂いていき、ミュミュに渡していく。
雛ドリが親ドリから餌をもらっているように、彼らはまるで親子のような、微笑ましい光景として、皆の目には映っていた。
「なあ、あの二人、仲良くないか？」
腹は満たされ、人のことにも気がいくようになったカイルが、ケインに囁く。
クレアも頷いている。
「俺たちの知らない間に、やつら、すっかり愛を芽生えさせちまったらしいな」
顎に手を添えて、真面目くさった口調でカイルが呟くと、ケインの横で、クレアも真面目な表情で頷いている。
言われてみれば……と、ケインもヴァルドリューズたちに注目すると、ばくばくと肉を頬張っているミュミュを見つめているヴァルドリューズの瞳は、普段よりも優しくなっているようだった。
普段は冷たい雰囲気の彼が、そのような表情をするのは、珍しいことであった。

「ヴァルドリューズさんは、本当はお優しい方なのよ。私に魔法を教えてくれる時も、
言葉は少ないけど、優しさは感じられるもの」
クレアは、師匠を尊敬の眼差しで見ている。
「へえー、あいつがねえ。実は、俺と同じくフェミニストだったのかあ」
そう言ったカイルには、クレアとケインの横目が集まる。
（お前はただの女好き）二人の目は、そう言わんばかりだ。
「それにしても、ミュミュとは意外なシュミだなー。あいつ、博愛主義だったのか？」
カイルは眉をへの字に曲げて、首を傾げた。
「いや、それとも……おーい、マリス、ヴァルって、ロリコンだったのか？」
後ろにいるマリスに、カイルが問いかける。
僅かな時間の間に、ヴァルドリューズはフェミニストから、ロリコンにされてしまった。
マリスは、バスターブレードの先に突き刺したトカゲの頭を持ち、カイルたちの輪の中に入る。
「なあ、あれ、どう思う？」
カイルが、ヴァルドリューズたちを顎で指す。
二人の様子を、マリスは、トカゲの頭にかじりつきながら見る。
「お前、ヴァルと一年以上も一緒にいるんだろ？　あいつの女の好みって、ミュミュみたいなヤツだったのか？」
カイルのセリフには、ケインもクレアも眉をひそめた。
「別に、女としてミュミュのこと見てるわけじゃないんじゃないか？　ミュミュは妖精なんだし、人間のコドモみたいなところがあるから、微笑ましく思

ってるだけじゃないか
なぁ」
　ケインが口を挟むと、カイルは、ふんと、小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。
「まったく、ケインは、『そういうこと』には疎(うと)いからなー。マリスはどう思う？　」
「なっ、なんだよ、悪かったな！　俺は、お前みたいに色恋沙汰ばっかり考えてないんだよ」
「……確かに、意外よね」
　マリスが、もごもごと口を動かしながら、ヴァルドリューズたちから視線を反らさずに言った。
「だって、ヴァルは、もうちょっと……」
「もうちょっと……なんだ！？　」
　カイルと、クレアまでもが身を乗り出す。
「ど、どうしたの？　みんな？　」
　マリスは面食らって、二人を交互に見ている。
「人間離れしてると思ってたヴァルも、女には、まったく興味がないわけじゃなかったのか！？　」
　カイルの目は輝き始めた。
「ヴァルドリューズさんの好みって？　」
　この手の話には、普段はあまり興味を示さないクレアであったが、その二人の迫力に、
ケインは圧倒され、黙っていた。
「い、いえ……、本人から聞いたわけじゃないから、確かじゃないんだけど、……単に、
あたしのカンなだけ……なんだけど……」
「けど……！？　」

妙に歯切れの悪いマリスに、声をそろえて、二人は詰め寄る。
「……だけど、……ホントは、あーゆーのが好みだったのかも知れないわね」
マリスは、にっこり笑顔を取り繕った。
「お前、何ごまかしてんだよ。らしくねえなあ！　はっきり言えよ」
カイルがじれったそうに言う。
「それより、みんな、肉がまだ残ってるわよ。冷めちゃったから、もう一回、焼きましょうか？」
マリスが、へらへらと愛想笑いをして、後退(あとずさ)りしていく。
「こら、マリス！　逃げるな！」
「そうよ！　話は、まだ済んでいないのよ！」
バスターブレードを持ったまま、マリスは炎のところにそそくさと戻っていく。
その後を、二人が責め立てながら、追いかける。
ケインは、その場に残っていた。
カイルたちが、元気を取り戻した証拠でもあると思い、勝手にやらせておくことにしたのだった。
（……そりゃあ、俺も、ヴァルに好みがあるんだとしたら、どんな女(ひと)なのか、全然興味がないわけじゃないけどさ……）
ケインは、彼らにはあまり取り合わずに、微笑ましいヴァルドリューズとミュミュに視線を戻す。
食べ終わったミュミュは、また元気一杯になって、ヴァルドリューズとケインの間を、何度も往復してみせたのだった。
残った肉はよく焼き、非常食用に取っておく。

ダグラに全員乗り、マリスの合図で、いよいよ、この先にあるというオアシス目指して、出発することになった。
「待て！　……あれは、……ヒトじゃないか！？　」
風に舞った砂煙の中に、何か人影のようなものを、ケインは見つけた。
よろめきながら近付いてきたその人は、ばたっとその場に倒れ込んでしまった。
「大丈夫か！？　」
ケインがダグラから飛び降り、駆け寄った。
軽めの防具を身に着けた、ケインたちと同じ年頃の男だ。
おそらく、傭兵だろうと、ケインは思う。
眉毛の濃い、少し面長の顔に、短い逆立った黒髪、背はケインやカイルよりも低そうだ。
「どうした、ケイン？　」
カイル、クレアもやってくる。
「おい、しっかりしろ」
軽く、男の頬を叩いて正気付かせる。男は、うっすら目を開け、ケインに、呻くように呟いた。
「……く、食い物……」
マリスが、ダグラを連れてきたところで、男の顔を覗き込む。
「あっ、この人……」
「マリス、知り合いか！？　」
「……っていうか、さっき、トカゲを追いかけてた時に……」
ケインが抱えている男は、完全に目を開き、マリスを見ると、目を血走らせ、口をぱくぱくさせた。
「……お、……お前……！　あの時の、小娘……！　」

男は、掠れた声を絞り出した。
「とにかく、この方の体力を回復して差し上げなくては」
魔力の復活したクレアが、砂の上に座り、男に両手を翳した。男の顔色は、みるみるよくなっていった。
「貴様――！」
元気になった男は、ケインから跳び退って、拳を構える。
「あの……、その節は、どうも」
マリスが、作り笑いをする。男は、そんな彼女を睨みつける。
二人の話から、先程のトカゲを彼も見つけて、取り合いになったというのがわかった。
きっと、マリスが力ずくで奪ったのだろう、と皆は解釈する。
ケインは、呆れたように、横目でマリスを見る。マリスは、肩をすくめた。
「俺の見つけたトカゲはどこだ！」男は、警戒した目を向けている。
「悪いけど、もう食べちゃったわ」
「何だと……！？」
男は、茫然と、砂地に膝を付いた。
「非常食用のが、まだ残ってただろ？」
隣で囁くケインに、マリスは人差し指を口に持って行き、「シッ」とやる。
「その代わり、あなたの体力は、今、クレアが回復させてあげたわ。それも、『ただ』で。よかったじゃない？」
マリスが男に、にっこり微笑んでみせた。
「ふざけるな！　そんなことで、この俺が貴様を許すと思うのか！？」
男は一層マリスを睨みつける。
「なによー、だから、悪かったって言ってるじゃないのー」

マリスが、ケインの後ろに隠れた。
そこにいる全員の記憶では、マリスが彼に謝った場面は、一度もなかったのだが。
「今さら、かわいこぶったって駄目だ！　」
男は、拳をシュッと突き出した！
それをケインは片手で受け止めた。
「なんだ、お前、邪魔する気か！？　」
男は、ギロッとケインのことも睨む。
「こいつが野蛮なのは、俺も知ってる。きっと、きみは、こいつにひどい目に合わされたんだろうけど、トカゲを食べなくても、きみの体力は、もう復活したんだし、たかが小娘のやったことだ。このへんで、すべて水に流してやってはどうだ？　」
ケインがそう提案するが、男は、一層ぎらぎらと目を光らせていく。
「その小娘は許しちゃおけねえ！　この俺様を、女の身で、負かしやがったんだ！　」
彼は、もう片方の拳も繰り出す。ケインは、それも受け止めると、その腕を捻って下に向け、男を睨む。
「男のくせに、女に手を上げようってのか！　マリスが非常識なのは認めるが、お前も戦士の風上にもおけないヤツだな！　」
「いてえっ！　放せ！　」
ケインの手を振り解こうと、もがく男を放してやる。
男は、片腕を押さえて、ケインから離れた。
「てめえ、……なんて名だ！　」
「ケイン・ランドール」
憎々し気に、彼を見上げながら、男は地面に、ペッと唾を吐いた。

「俺は、『青い豹（ジャガー）の異名を持つ、ダイだ！　覚えておくがいい！』」
ダイは、彼らを一睨みすると、砂煙の中へと消えていった。
「マリス、ヤツに何をしたんだ？」
マリスは、後ろめたそうな上目遣いで、ケインを見上げた。
「別に……。トカゲを引っ張り合ってたら、ちぎれそうになっちゃったから、あいつを……ちょっと、跳んで蹴っただけよ」
「ほほう。あいつに、跳び蹴りをくらわせた……と？」
「そしたら、しばらく動かなかったから、トカゲを諦めたのかと思って……」
「ほう、跳び蹴りして、ヤツを気絶させた……と？」
（ちょっと目を離したスキに、一体、何をやらかすんだ、こいつは……！）
ケインは、溜め息をついてから、口を開いた。
「またひとり、敵を作ったな……」
疲れたケインに、ちょっとだけ、さすがに悪そうに微笑んだマリスだった。

オアシス目指して、彼らは今日も行く……。

砂漠の生き物（2）（後書き）

ガラガラオオトカゲ、ワニ肉みたいなんでしょうかね。
砂漠の生物、植物、次も出てきます。

ヒトの道

「……何か見えるわ！　」
マリスが、前方を見据えた。
彼女の言う通り、地平線の彼方には、白い建物のようなものが、ずらっと横に並んでいるのがわかる。日は昇っており、暑さのため、景色は、ゆらゆらとぼやけていた。
「なんだ？　町でもあるのか！？　」
カイルが、ダグラから身を乗り出す。
『白い騎士団』一行は、その先にあるというオアシスを、単に次元の穴への目印ということではなしに、捜していた。
日除けの白い布は砂色に染まり、マリスの甲冑の、金色の凹凸にも、砂が積もっている。
ヴァルドリューズの黒いマントも、砂で灰色になっており、ミュミュも、動物が全身の毛を振るうようにして、時々身体を振って砂を払っていた。
厄介なことに、風が地面の砂を荒らして行くことは、しょっちゅうであった。
砂が入らないように、常に目を細めているので、皆の人相も悪くなっている。
そして、何よりも、水と食料が尽きてしまったのが、身体だけではなく、精神にもひどくダメージを与えているのだった。
トカゲの肉で飢えを凌いだのも、ほんの一時的なことに過ぎず、新たな飢えと乾きは、直ちにやってきていた。

そんな時であった。地平線の彼方に浮かぶ町を発見したのは。
「なんだか、全然近付けないような……？」と、カイル。
近いと踏み、日中でも進み続けたが、見つけてからかなりの時間が経つにもかかわらず、一向に近付いているという気がしない。
「……もしかして……」
マリスが躊躇（ためら）いがちに言いかけるが、その続きをなかなか言おうとしない。
「もしかして……なんだ？」
同じダグラに跨がるケインが、後ろから催促してみるが。
「……あれが、噂に聞く――蜃気楼（しんきろう）ってやつなんじゃ……」

――蜃気楼――！？

一行のダグラの足は、一遍に止まる。
「……おい、ミュミュ、見て来いよ」
カイルが、後ろのヴァルドリューズを振り返り、その肩に止まっているミュミュに向かって、目付きの悪い顔のままで言った。
「えーっ！　……もう、しょうがないな」
ミュミュは、ぶつぶつ言いながら、その場から姿を消した。
「……『本物』を見たのは初めてだわ。ベアトリクスにも辺境があって、ちょっとした砂丘なんかもあったんだけど、ここまでの規模じゃなかったし、そこまで深入りはしなかったから。……やっぱり自然界は、ナメらんないわね」
首だけ後ろに向けて、マリスが言った。
「……そうか、ベアトリクスに辺境が……だから、マリスは、砂漠の生き物に詳しかったのか」

「じいちゃんのところで見たものと辺境で見たものが、こんなところでも見られると
は思わなかったけどね」
ミュミュが戻るまでの間は、たあいもない話でもしていないことには、精神を正常
に保つことなど出来そうもなかった。
すると、そこから、少し離れたところにある岩だと思っていたものが、のっそりと
動き出した。
クレアが小さく悲鳴を上げる。
「ガンダルだ……！」と、ケイン。
「へえ、よく知ってるじゃない」マリスが感心した。
ケインが、その動物を知っていたのは、マスターソードを手に入れる時に、見た覚
えがあったからであった。
ガンダルは、全身が鉱物のように固く、石や岩にそっくりで、砂や石などを食べる
生き物だった。
その横を、てのひらほどの大きさの灰色をした小動物??ネズミが、ちょろちょろっ
と通る。目を凝らすと、その後ろを、長い紐状の物がうねり、砂地に出来ていた波の
模様と似た、うねった紐状の跡を残し、密かにおいかけているのもわかる。
「砂ヘビだわ」
再び、マリスが言った。ヘビは、見た目も砂と同じ色をしていて、見分けがつきに
くい。マリスの目が、きらっと光ったように、ケインには思えた。
「……おい、……まさか……？」
クレアが聞けば悲鳴を上げそうなことを思い付いたのではないか、

と心配した彼は、
口には出さずにマリスに確かめようとしたつもりであったが。
「ふっふっふっ、すぐには捕まえないわ。あのヘビが、ネズミを食べて、太ったところを――！」
「いやーっ！」
マリスの呟きが聞こえたクレアは、ケインの予想通り、泣きそうな声を上げる。
「あのなあ、ヘビは歯がないんだぞ？　ネズミを食っても、丸ごと飲み込んでるだけなんだから、それを捕まえて食ったりしたら、俺たちも、中のネズミまで、そのまま食うことになるんだぞ」
ヘビも、前回のオオトカゲのように焼けば食べられそうなことは、皆にも見当は付いたが、ネズミは、動物はおろか、ヒトの死体まで食べる動物だった。そんなものを食べるのは、皆、さすがにごめんであった。
「あたしもネズミは初めてだわ。どんな味がするのかしら？」
だが、マリスの答えは、やはり『そんな』だった。
「いやよ！　今度こそ、絶対イヤッ！」
クレアが首を横に振る。カイルも、明らかに嫌そうな表情だ。
それに構わず、マリスはそろそろとダグラから降りていく。ヘビであれば、トカゲと違い、動きがおそいと踏んでか、甲冑は着たままだった。
ガンダルは、いつの間にか、じっと動かず、『岩』になってしまい、その先をネズミが、ちょろちょろと進んでいき、その後を一定の距離を置いてヘビが追い、更にマリスが追う……。

「この際だ。ネズミは、マリスに食ってもらうとして、ヘビに、トカゲと同じ期待をしようぜ」
カイルがケイン、クレアに囁く。
そこで、ヘビがネズミに襲いかかった！　頭をぐっと持ち上げたかと思うと、一気にネズミの首に食いついたのだった！
「チーッ！　」
ネズミは一鳴きし、その場で飛び跳ねて抗った。ヘビも、地面に身体を打ち付けられる。二つの生き物は弾みながら、または、転がりながら、格闘していた。
それを、じっと見守り、タイミングを計っている『ヒト』がいる。

ズザザザザーッ！

突然、二匹の足元が崩れ出した。砂がみるみる沈んで行き、凹んでいく。
「食い物っ！　」
二体の生き物目掛けて駆け出したマリスも、ズボッと砂に足を取られ、鎧を着た重い身体は、砂にめり込んでいった！
「マリス！　」
ケインが慌ててダグラを駆り立てた！
砂は、ますます深く沈み、底が無いかのように、どこまでも、さらさらと崩れていく。砂地に出来た突然の大きな『お椀』の底へと、ネズミに食いついたままのヘビと、
その後ろのマリスとが、もがけばもがくほど砂に運ばれていった！
「掴まれ！　」

辿り着いたケインが、ダグラの上から手を伸ばす。マリスも砂まみれになりながら、
手を上に伸ばす。その時だった！

ザバァァァアアア……！

砂の椀の底から黒い物が現れた！
体長がヒトひとり分はありそうな、緑色の大きな筒のような形のムシであった。
長い、折れ曲がった足が数本、身体の横から生えていて、先端はラッパ形の丸い輪
のように赤くなった口が、パクパクと、開いたり閉じたりしている。
緑色の蔓か触角
のような長いものも数本、うねうねと、まるで手をこまねいているようだ。
それは、巨大な食虫植物ならぬ、食肉植物であった！
ごろごろと転がって行ったネズミとヘビを、その口が、今か今かと待ち構えている。

「きゃあっ！　」
マリスが珍しく女の子のような悲鳴を上げて、それから顔を反らし、目をつぶった。
そのせいで、彼女がもがきながら夢中で掴んだのは、ケインの差し出した手ではなく、
ダグラの足だった。
「ぐげるるるっ！　」
バランスを崩し、悲鳴を上げるダグラごと、ケインは砂の椀に突っ込んだ！
砂からなんとか顔を出すと、目の前では、巨大な赤い口の輪の中へ、ネズミとヘビ

が転がり込んだところであった。
「うわあああ！」
「きゃあああ！」
巨大ムシの赤い輪は、真一文字に閉じると、首にあたる細くなっていた管の部分が急激に膨らみ、吟味しているように、もこもこ動いている。そのうち、留まっていた塊は、管の奥の筒のような身体の中へと送られていき、赤い口からは、ぷっと砂を吐き出した。
空になった口が、次なる獲物を求め、捕えようと、二人に向かい、大きく開かれた時――
ぼほわぁっ！
突然の風圧が、彼らを砂ごと巻き上げた。
マリスとケイン、ダグラは、一気に砂地獄から抜け、そこからは離れたところへ落下した。
ダグラは、恐怖心からか、狂ったように嘶(いなな)き、今までにないスピードで駆けていってしまった。
ケインが後を追おうか迷ったが、もし、本当に狂ってしまったのだとしたら、乗ることは無理なので、やめた。
「スナジゴクオオクイだ。気を付けろ」
ヴァルドリューズがダグラに乗ったままの状態で、片手を降ろしたところだった。
二人を巻き上げた風を起こしたのは、彼であったのは一目瞭然だ。

「噂には聞いてたけど……なんて不気味な……！」
マリスが、ごほごほ噎(む)せながら、起き上がる。
「何！？　お前も、知ってたんなら、気を付けろよ」
砂が目に入ったケインは、涙を流しながら言うが、それは、目が砂を追い出すためだけではなかっただろう。
そして、偵察に行っていたミュミュが、いつの間にか、ヴァルドリューズの肩に乗っている。とうに戻っていたようだ。
「あれは、やっぱり『しんきろう』だったみたい。あっちの方角には、なんにもなかったよ」
そのミュミュのセリフは、一向にとって、極めつけだった。
「……なあ、水と食い物がなくなってから、今日で何日経つ？」
繰り返されるカイルの質問には、誰も答えることが出来なくなっていた。
ヘビを食べ損ねた上、ケインとマリスの乗っていたダグラには去られ、ヴァルドリューズのダグラに、無理矢理三人乗って進む。
あれから、ガンダル以外の生き物たちに出会うことなく、相変わらず容赦なく照りつける日差しの中で、彼らは、砂の中に埋(うず)もれていた。
砂は表面は熱く、直に触れれば火傷するが、深く掘ってみると、多少温度は下がる。
ヴァルドリューズがてのひらから風を起こし、削ったところへ、皆は俯せになり、火照(ほて)った身体を癒していた。
「……水……食い物はともかく、水だ……！」
その言葉は、カイルが呻く。

生き物さえいれば、焼いて食べられることは立証されたが、水だけは、どうしようもなかった。こうしている間にも、体中の水分が抜けていくのが感じられる。

もう水を口にしなくなってから大分経つというのに、汗だけは出ていた。服の上からでも、じりじり照りつける日差しに、服を素通りして、まだ残っているのかと思われるほど、水滴が身体から逃げていく。

身体に必要な水分であり、このままでは脱水症状で本当に危険な状態になるであろうことは、皆、身体で感じていた。

例え、今、生き物が現れ、焼くことが出来てたとしても、口の中は粘膜のようなもので粘ついているだけで、舌も喉もこう乾き切ってしまっては、食べ物を飲み込むことさえ困難だっただろう。

一行、二度目の、生死をさまよう大ピンチであった。

「クレア、魔法で水は出せないのか？」

カイルが、力のない声で言った。

「出しても、本物の飲料水というわけではないから。水の特性を生かした、似たような物質の……」

呟くようなクレアの説明は、途中で終わってしまった。

そのまま、砂の中で時間は過ぎていく。

もはや、呼吸でさえも、苦しくなってきた時――

ぱたぱたぱた……

ケインは、耳元で、何かが羽ばたくような音がしたのを感じた。

（とうとう、耳までイカレてきたか）
うっすら目を開けてみると、灰色のトリの雛が、すぐそこで飛んでいた。
ケインの目は、カッと見開かれた！
雛は、まだ未発達な、小さな翼で、懸命に飛んでいる。
ケインは、むくっと起き上がり、夢中で雛を掴んだ。
「ピーッ！」
雛が鳴き声を上げてもがくが、ケインの両手は、しっかりと握り締めている。
枯れていたと思っていた唾液が、舌に甦る。
（生でもいい！　食ってやる！）
と、思ったその時――！
「たーっ！」
「のわあああっ！」
彼の右肩に、突然、何かが強くぶつかってきて、彼の身体は弾き飛ばされ、砂煙を上げ、転がった！
思わず、雛を手放す。
一体、何が起こったのかわからず、ケインは、衝撃を受けた肩を押さえながら、身体を起こすと、雛を片手に勝ち誇ったように笑うマリスの姿が、ぼうっと見えた。
「……うっ、マリス！　……なんて卑怯な……！」
どうやら、彼女に飛び蹴りされたらしいと、ケインは理解した。
「俺が見つけたんだぞ！」
よろよろと立ち上がり、マリスを睨みつける。
「なによ！　あたしが見つけてきたトカゲを、あんただって食ったじゃないの！」
「いつの話してんだ！？　だったら、そいつをみんなで分けて食おう！　独り占めな

んかすんなよ！」
ケインがそう言うと、いつの間にか、彼女の後ろにいたカイルが、引ったくるようにして、雛を奪う。
「やったあ！　食いモンだぜーっ！」
カイルは、雛を掴んだまま小躍りしていた。
「こら、カイル！　今、みんなで分けようって言ってたとこなのに……！　人の話聞けー！」
「こんな小さいモン、山分けなんかしたら、腹の足しにもなんねえよ！　俺は、お前らと違って、か弱いんだから、お先に頂かせてもらうぜ！」
「あたしだって、もう限界なんだからー！」
マリスが、パシッと雛をはたき落とす。それを、ケインがタイミングよくキャッチした。
間髪入れずに、ひゅっとマリスの蹴りが飛んでくるが、彼は、とっさに腕で防御した。
「ちっちっ、同じ手は食わないぜ！」
マリスに向かい、人差し指を振っている間に、雛は、ピーピー鳴きながら、よろよろと飛び立った。
はっと、ケインとマリスが振り向くと、カイルが両手で、バシッと挟んで捕まえた。
「ピィーッ！」
「はっはっはーっ！　俺のもんだぜー！」
野盗のごときカイルが、トリを持って、よろよろと走り出すが――
「返せー！」
「たーっ！」

「うわあーっ！」
ケイン、マリス、カイルは、必死に雛を奪おうと、取っ組み合っていた。
「みんな、いい加減にしてっ！」
クレアの声と同時に、三人の身体は、突風に見舞われ、吹き飛ばされた。その上、
砂や小石がバチバチと当たって痛い。
「目を覚ますのよ！『それ』は、ミュミュよ！」
「へっ！？」
三人は、クレアのセリフに、思わず目を思い切り見開き、彼女のてのひらにあるものを見直した。
「ひどいよ、みんな！　ミュミュのこと、食べようとしたなーっ！」
ピーピー言っていた灰色のトリの雛は、よく見ると、体中を砂だらけにして泣いているミュミュに、移り変わっていったのだった！
「ご、ごめん！　ミュミュだったのか！？　てっきり、トリの雛だと……」と、ケイン。
「そうそう。悪気はなかったんだよ」カイルも弁解する。
「ごめん。あたしも、てっきり、モグモグだと……」
「……おい、なんだそりゃ？」マリスに向かい、ケイン、カイルが眉をひそめる。
「うわーん！　ひどーい！」
ミュミュが飛び回りながら、泣き叫んだ。
「俺としたことが……！　飢えのあまり、幻覚症状まで……！」
ケインは、がっくり肩を落とし、溜め息をついた。
「我ながら、ショックだ。自分に、あんなあさましいところがあったなんて……！」
「やれやれ、こういう時に、人間の本性って、出るモンなんだよな

あ。あはははは！」
落ち込むケインと対照的に、カイルが明るく笑っている。
「あたしじゃないの。サンダガーが欲しがってたのよ」
「都合のいいこと言うな！」
マリスの言い訳に、即座にケイン、カイルが言い返すと、クレアが両手を組み合わせ、天を仰いだ。
「ああ！　人間て、なんてみにくい！」
「あんただって人間でしょ！」
「ひどいよー！　ひどいよー！」
――飢えが最高値に達し、皆、神経が尖って、ぴりぴりしていた。
ふと、ある考えが、ケインの頭をよぎった。
（腹も減り、体力、精神力ともに衰えているこんな中、もし敵にでも遭遇したら？
クレアやヴァルだって、ベストの状態からすれば、魔力は減っているはずだ。しかも、
マリスは、剣を持っていない……！　もしかして、俺たちは、最も危険な状態なんじゃ
……！？）
この世に二人といない『獣神サンダガー』を操ることのできる、特異な少女戦士と、
上級魔道士、魔法剣の男、魔道士見習いの巫女、役に立つんだかなんだかよくわから
ない妖精に加えて、伝説の剣を二つも持っているケイン――という最強（？）のメンバー
は、こんなところで、敵または自然の掟によって、息絶えてしまうのだろうか！？
ケインは、ヴァルドリューズに目をやる。
（もしかして、ヴァルが結界でも張ってくれてるんだろうか？　だけど、ずっとなん

て無理だろうし、よくはわからないけど、なんとなく、今は結界は張られていない気
がする……）
　周りは、まだ騒いでいる中、ケインはヴァルドリューズに歩み寄った。
「……今、敵に出てこられたら……絶対絶命かもな」
　彼の無表情な碧眼が、ゆっくりとケインを見下ろす。
「今のところ、その気配はないが、用心に越したことはないだろう」
　ケインは、黙って彼の目を見つめた。
　極限状態の中、それでも彼は、常に敵を意識していたのだった。
　高い魔力を身につけるには、相当な精神力をも必要とする。
　この砂漠では、どんなに鍛えられた精神の持ち主でさえ、正常に保つのは困難だっただろう。
　いくらか魔力を消耗していたとしても、上級魔道士とは、皆がヴァルドリューズのように、こんな時でも冷静に物事が判断できるものなのだろうか。
　だとすれば、ベアトリクスの魔道士団や、他の魔道士たちを敵に回すということは、非常に恐ろしいこととなる。
　ケインは、「できれば、ヴァルだけが特別であって欲しい」と願うのだった。
「……というのも、あまり断言できないのだが」
　大分経ってから、ヴァルドリューズが付け加えた。
「どういうことだ？　」
　ケインが聞き返すと、ヴァルドリューズは躊躇（ためら）いがちに口を開く。
「マリスの甲冑は、彼女の発する魔力を、外に漏らさないよう細工してある。私の魔力も、極力抑えているので、遠くの者たちには嗅ぎ付けるのは困難なはずだ。だが、

それに加えて、どうもこの砂漠は……『魔力を読み取るのが困難』なのだ」
　それがどのような意味なのかは、ケインには憶測で感じ取るしかない。
「俺は、魔道には疎いから、よくわかんないんだけど、アストーレからフェルディナンドへ行った時みたいに、高速で飛ぶか、空間を通って行くことは出来ないのか？」
「そのつもりであったが、様子を伺っているうちに、次元の穴の場所が、はっきりとわからないこともあるが、時空を移動するよりも、足で進んで行った方が、まだ安全だという気がして来たのだ。内部に入れば入るほど、そのようだ。バヤジッドのペンダントを開けてみろ」
　言われて、ケインは、ポケットから木のペンダントを取り出し、開ける。
　彼の肖像画は、絵のままだ。時々、ぼやっと揺れるが、実写になるまではいかない。
　顔を上げてヴァルドリューズを見ると、彼も頷いた。
「やはりな。通信が出来なくなっている。何か、魔力を妨げるものが、この砂漠にはあるのだ」
「魔力を妨げるなにか――？　次元の穴と関係あるのか？」
「それはわからない。が、今まで見て来たものより、規模の大きいものなのかも知れぬ」
　それを、ケインは、サンダガーでなければ、倒せない魔物が潜んでいるということ、と受け取る。

「そのおかげで、敵の魔道士たちには、今のところ、遭わずに済むのだろうが、逆に、こちらも彼らを察知しにくいということだ。ただし、ミュミュの特殊能力は、あまり関係ないらしいが」

「……ってことは、今のところ、一番頼りになるのは、あいつってことか。……非常〜〜に、頼りないけど」

ケインが、力なく笑う。

「どんな敵が潜んでいようが、下手したら、俺たちの命は、ミュミュ（あいつ）に握られている――俺には、そっちの方が怖いな」

ヒトの道（後書き）

砂漠は圏外なんですね……（^^；

オアシス

「水の匂いがするよ」
羽を勢いよく羽ばたかせて、ミュミュが言う。
「今度こそ、本当なんだろうな？　」
カイルが、ダグラの上で、疑わしい目を彼女に向けた。
「ウソじゃないもん！　さっき、ミュミュ、見て来たもん！　」
ミュミュは、ぷーっと頬を膨らませた。
マリスが、はっとしたように前方を見据えた。
「……何か見えるわ！　」
皆で目を凝らしてみると、地平線の彼方の、ゆらゆらと景色がぼやけている辺りに、
白い、建物のようなものが横に並んでいるのが見える。
「どうせまた蜃気楼なんじゃないの？　俺たち、あれに何回騙されてんだよ」
溜め息混じりに、カイルが言った。
「だから、オアシスだってばー！　さっきから、言ってるでしょー！　」
ミュミュが、カイルの金髪の一束を引っ張りながら、わめいた。
「ああ、ああ、わかった、わかった」
なかなか信じようとしないカイルは、いい加減な返事をした。

「オアシス……！　」
思わず、カイルが言葉を漏らす。
何もなかった砂山を下ったところに、小さな村が見え、その奥には、空と同じく、
青く澄んだ湖のようなものが広がっていたのだった。
泉の周辺や、離れたところにまで、濃い緑色の草が生えていた。
まさに、命の泉

である。
「とうとう着いたのね……！」
クレアが、目尻をそっと拭(ぬぐ)う。
それが最終目的地ではなかったが、そのセリフはふさわしかった。
「ほーらね！　ミュミュの言った通りだったでしょ？」
ミュミュは、得意気に手を腰に当ててみせた。
一斉にダグラをオアシス目掛けて走らせる。
湖の手前には、白い石でできた四角く低い建物やテントが並ぶ。
以前、目にした、
布を被った行商人(キャラバン)の姿だけでなく、旅人の姿も多い。
「水だー！　水だー！」
一行の中で、一番に泉に辿り着いたのは、カイルだった。今まで
萎(しお)れていた
わりに、どこにそんな元気があったのかと皆が思うくらい一目散に
泉の中へ、ばしゃ
ばしゃ入って行くと、がぼがぼ水を飲み始めたのだった。
続いてマリスとケインが水に飛び込んだ。
ひやーっと冷たい感触を想像していた彼らであったが、予想に反
して、温水であっ
た。炎天下では、当たり前かと思い直し、もっと深いところへ行け
ば冷たいであろう
とわかっていながらも、我慢し切れずに、ぬるい水を飲む。
遠目から見れば、青く見えた水も、実は濁っていて、とても綺麗
とは言えなかった
が、この時ほど、彼らは、水がこんなにも美味しいと思ったことは
なかった。空腹で
もあったが、まずは、この水だけで充分だった。
一通り、全身を水に浸かり、満足いくほど温水を飲みまくると、
後は、それぞれ好
き勝手にする。

カイルはぷかぷか仰向けに浮かんでいて、気持ち良さそうであったし、マリスは甲
冑を脱いで、少年服のまま泳ぎ回っている。
いつの間にか泳いでいたミュミュは、カイルの腹の上に乗っかり、一休みする。
他の旅人たちも、大勢ではないが、一泳ぎしている人、服を洗っている人などもいた。
少し離れたところでは、ダグラを洗っている人もいた。
（……てことは、俺たちは、そんな水をがぶがぶと飲んでいたってことか……！？）
と、ケインは思ったが、この暑さの中、あまり細かいことは考えるのはやめた。
岸辺では、クレアは両手で水を掬って飲み、顔を洗ったらしく、水を滴らせていた。
ヴァルドリューズが水を飲むところをケインは見なかったが、彼もおそらく飲んだのだろう。今は、木陰で座っていた。
水を浴び、飲んで、ひとまず息を吹き返した一行は、さっそく食堂を探し、駆け込んでいった。

ガツガツガツガツ……！
一行は、夢中で食べていた。
「お客さん、よっぽど飢えてたか？　そんなに慌ててかっこんでると、喉に詰まる。
お茶飲みながら食べるよろし」
「お茶ぁ？　お茶なんかより、水持って来いよ！」
彼らの餓鬼（がき）のような食いっぷりに呆れながらも、心配している現地人の店員

に向かって、そちらを見もせずに、食べながら、カイルが命令する。
皆、一心不乱で食べている。聞こえてくるのは、フォークが器に接触する音と、
食べ物を飲み込む音くらいであった。
何かの肉を煮込んだものと、カリカリに焼いたもの、野菜のぶつ切りと、動物の骨
の入ったスープ、固いパンのようなもの、木の実――などを、次々と胃袋に詰め込ん
でいく。
味は、彼らにはいまいち馴染みのないものばかりだったが、飢えていたせいか、
非常に美味しく感じられたのだった。
「おう、あんちゃん、どんどん頼むわ！」
カイルがスープを飛び散らせながら飲み、通りすがりの店員に催促する。
店員は、「まだ食うか！？」と言わんばかりに目を見開いていたが、一行は構う
ことなく、ただただ目の前に並んだものをかっ込んでいくのみであった。
ヴァルドリューズも、普段よりも速いペースで食べていた。ミュミュも、普段のよ
うに選り好(ごの)みしている暇はないようで、彼らの中で、一番、食の速度の
遅いクレアの皿から、パクパク食べていた。
一行が、デザートに大きな木の実を割り、なかなかに、あっさりとした果汁と一緒
に、果実をスプーンで削り取って、食べているところだった。
「なんだ、この店は。ほとんど品切れじゃないか。それなら一体何ならあるというん
だ？」

傭兵の成りをした黒い短髪の若い男が、眉間に皺を寄せている。同じテーブルには、連れである、金髪で色白の、同じく若い傭兵もいる。
その二人に向かって、店員がペコペコと頭を下げていた。
「今は、木の実と果実だけで……。さっきまでは、まだたくさん残っていたんですがね……」
白い長い布に身を包んだ、色黒で痩せた店員が、ちらっと、『白い騎士団』のいるテーブルを見た。
「またお前たちか」
文句を言っていた黒髪の傭兵が、眉間に皺を寄せたまま、一行のテーブルに近付いた。
皆は、その男の顔には、見覚えがあった。
「きみは、確か??」
「誰よ、あんた」
ケインが思い出しかけた時に、マリスが、スプーンで果実を口に運びながら、遮った。
「忘れたとは言わせないぞ！　貴様ら、トカゲどころか、他の食い物まで、俺たちから取り上げる気か!?」
男は、まだ若いはずであるのに、額には、皺が刻まれていた。
「……ああ！　思い出したわ！　あのガラガラオオトカゲを奪い合った、確か……」
マリスは、ぽんと手を打っておきながら、その続きがなかなか出て来ない。
「だからさ、あいつだよ。えっと……あれ？　何てったっけ？」
ケインも、名前までは思い出せないようだ。

「『青い豹（ジャガー）のダイ』だ！　」イライラしながら、彼は名乗った。
「あら、そんな名前だったかしら？　」マリスが首を傾げる。
「本人がそうだと言っているのだ！　」
「そう？　その、ジャガーのダイさんが、あたしたちに、何の用なのかしら？　」
けろっとしてマリスが問うと、ダイが拳をわなわな震わせた。
「とぼけるな！　俺たちの食事を、一度ならず、二度までも邪魔しやがって！　今度
という今度は、絶対に――！　」
「あら、そう言えば、お連れの方がいらしたのね」
ダイの後ろに立っている、金髪の背の高い青年に、マリスが気付く。
「人の話の腰を折るなー！　」
ダイは、こめかみに青筋を立てて叫んだ。
「初めまして。僕、クリスと言います。先日は、ダイが大変お世話になったそうで」
クリスと名乗ったハンサムな青年は、一行に対し、にこにこと人の好い笑みを送り、
馬鹿丁寧にお辞儀をした。悪気はなくとも、男たちにとっては、鼻につく行為だった。
「バカ野郎！　お礼言ってどうする！？　こいつらは、俺がせっかく捕まえたトカゲ
を食っちまい、今だって、こいつらのせいで、俺たちの食事がなくなっちまったんだ
ろうが！　」
「ええっ！？　そうだったの！？　」
状況が、あまりわかってなさそうなクリスに、ダイがイライラしたまま、きつい
口調で言い放った。
「ちょっとタイミング悪かったみたいね。同情するわ」

「貴様に言われても、真実味がないわ！　女のくせに乱暴だわ、よく食うわ――
まったく、品性のかけらも感じられんな」
　マリスをじろじろ睨みながら、ダイが憎々し気に言う。それは、なかなかに当たっていると、マリス以外は心の中で頷いたことだろう。
「でも、もう食べちゃったものはしょうがないし……よかったら、夕飯奢るけど、それで許してくれる？　」
　マリスは、両手を合わせて、小首をかしげ、にっこり笑ってみせた。
「今さら、かわいこぶってもだめだと言っただろう！　金で解決しようというその魂胆は、ますます気にいらん！　」
　余計に、彼は腹を立てた。
「だって、他にどうしろっていうのよ」マリスが肩をすくめた。
「食い物の恨みは拳でつける。貴様、正式に、俺と勝負しろ！　」
　ピシッと、ダイがマリスに指先を向けた。
「ダイ、いくらなんでも、女性にそれは乱暴なんじゃないの？　そんな、食べ物のことくらいで」
　横から、クリスが口を挟んだ。
「うるせー！　だいたい、貴様が大事な食料を、砂漠で落としたりするから、こんなことになるんだ！　」
　彼の怒りは、その連れにまで及んだ。
「まあ、食料を……」
　クレアが、手を口に当てる。
　そのクレアに向かって、クリスが、にっこり微笑んでみせた。
「そうなんですよ。僕たち、前のいくさの時から一緒に行動してる

んですが、負け
いくさだったんで、お金がもらえずで。賞金稼ぎの話を聞いて、魔物を捜して、こん
なところにまで来ちゃったんですけど、生憎、ガイドにお金を取られて逃げられてし
まって、たまたま身に着けていた、なけなしのお金しか手元になくて……しかも、布
袋に穴が開いていて、そこから、知らない間に食料がポロポロ落ちてたみたいなんで
すよ。ひどい話でしょう？」
クリスは、困ったように笑った。
（笑ってる場合なんだろうか？）
ケイン、カイル、クレアは、目を見開いて二人の傭兵を見ていた。
「人事（ひとごと）のように言うなー！　お前が、マヌケだから、俺がトカゲを捕まえ
ることになり、それが、この小娘に蹴り倒されるハメになったんじゃねーか！」
ダイは、額のあちこちに血管を浮き上がらせ、切れそうになっている。
それとは対照的に、クリスの方は、にこやかに微笑んでいた。
「ああ、そうか。ダイは、このお嬢さんに負けたことが気に入らなかったのか」
「うるせー！　負けたわけじゃねえ！　あの時は、腹が減ってて、普段の実力が出せ
なかっただけだ！」
ダイは、またじろっとマリスを見下ろした。
「というわけだ。わかったか、貴様！　表へ出て、俺と勝負しろ！」
「いやよ」
あっさりとマリスが拒絶したので、ダイは拍子抜けした。

それは、ケインたちにとっても、意外であった。今まで空腹で暴れられなかった分、
これをいいことに一暴れするものと思っていたのだが。
「今日は、遊ぶって決めたのよ。今まで死の瀬戸際を歩んできたのよ。やっとオアシスに辿り着けたんですもの。久しぶりに、のんびりしたいわ」
マリスが両手を伸ばして、伸びをしながら言った。
「だったら、貴様、勝負しろ！」
「は！？」
ダイの指先は、ケインに移動していた。
「なんで俺が？」
「貴様に掴まれたところが、しばらく痣(あざ)になっていた。かなりの武道の使い手
と見込んで、言ってやっているのだ。有り難く思え！」
「はあ……それは、どうも」
ケインは、面食らったまま続ける。
「でも、生憎だけど、俺もパスするよ。理由は、彼女と同じだ。今日くらいは、ゆっくりしたいからな」
ケインも、わくわくを隠せない様子であった。
「ふん、怖じ気付いたか」
ダイは、その後もしつこくマリスとケインを挑発していたが、二人とも、それどころではなく、オアシスで遊ぶことで、頭がいっぱいであった。
「ねえ、ダイ、そんなことよりもさあ、僕、おなか減っちゃったよ。別の店に行かない？」
クリスの一言で、いざこざは、収まったのだった。
食後、一行は、また大きな湖に戻り、乗っていたダグラを洗って

いた。
ダグラを水の中へ連れていくと、脚を折り畳み、水の中に座る。
借りた手桶で、カイルが背中に水をかけてやり、ケインが、布で、毛並みに沿って
こすり洗いをする。ダグラは、気持ち良さそうに、目を閉じた。
もう一頭の方は、マリス、クレア、ヴァルドリューズが手入れをしている。
クレアが水をかけてやり、マリスが、布でダグラの身体を拭いてやっているのだが、
力が入り過ぎて痛いのか、ダグラが嫌がって鳴いている。ヴァルドリューズが代わる
と、気持ちよさそうに目をつぶったのだった。
その後、宿を取り、そこでダグラを預けると、彼らも水浴することにした。
宿屋の主人の話では、男女別に水浴場があるという。
着ていた服は、ボロボロとまではいかなくとも、砂だらけで、色褪(あ)せていて、
ところどころ変色もしていたり、大分ほころびも目立っていた。
行商人(キャラバン)の屋根のない店が、ずらっと並んでいる中、男性、女性に別れ
た一行は、まずは着替えを買い、それから、水浴びをしようということになった。
「あんまり種類ねえなあ」
カイルが、眉をひそめる。
キャラバンと同じような、上から下までを白い布で覆い、腰にサッシュを巻いたも
のや、東方の民族らしい商人の話では、それこそ魔道士チョウが履いていたような膨
らんで足首のところが、すぼまっているパンツと、短いベストなどが主流だといい、

ケインやカイルが着ているような傭兵用の服などは、あまり見当たらない。
皆、各国から出稼ぎに来ている商人たちの、それぞれ出身国の特徴がでていたが、
当然のことながら、暑さに強い国のものが圧倒的に多かった。
「この先も砂漠が続くんだし、通気性のいい生地のものがいいかものな」
「そうだな」
ケインとカイルは、お互い頷き合い、ヴァルドリューズは、いつものように、特に
反応はない。
動き易さも考慮すると、結局は、あまり柔らかくはないが通気性の良さそうな生地
で出来た、膨らんだ白いパンツとベストにターバンというスタイルに落ち着いた。
三着一遍に買うから安くしろと、カイルが値切ったため、安く手に入ったので、
カイルもケインも満足だった。
男三人は、さっそく購入した服を持って、水浴び場へ向かう。
そこの番人には、始めに見た大きな湖のようなところとは違い、岩場で固められた
方へと案内される。
岩の壁は高く、外からは見えない造りになっていた。そのおかげで、そこの水は、
冷たかった。
彼らは、貴重品や剣を、近くの岩の上に置き、早々に水に浸かった。
「はー、気持ちいいー！」
カイルが、ばしゃばしゃ水で顔を洗い始めた。
水場は、彼らが思ったよりも広い。

カイルとケインは、ヴァルドリューズに荷物を任せ、泳ぐことにした。
「向こう側まで競争だ！」
「よーし！」
他にもぽつりぽつりと人はいたが、スペースを探して、二人は、わざわざ、ばしゃばしゃと、水飛沫（みずしぶき）を上げて、泳ぎまくった。

水浴び場では、中心へ行くほど深くなっていき、彼らでも足が届かないほどであった。自然に湧き出ている泉のようで、水は澄んでいる。
あれほど容赦なく照りつけ、恨めしく思っていた太陽も、その泉の中からは、心地よく感じられた。
「ああ！　生きててよかった！」
仰向けになって、ぷかぷか浮いているカイルは、しみじみ感動を噛み締めていた。
ケインも同じ気持ちだった。
死にかけたこともあったが、ここへきて、一気に緊張の糸が切れたようであった。

水から上がると、彼らは、購入した服を手に取る。
「どうやって着るんだ、これ？」
「さあ……？」
ケインもカイルも、このような民族衣装は着方がわからなかった。
「もう五年くらいになるかな。俺に『武浮遊術（ぶゆうじゅつ）』を教えてくれた、東方の女の子が、似たような服を着ていた気がするけど、服の着方なんかは教わらなかったし……」
ケインたちが、どうしたものかと手を付けられないでいる横では、

ヴァルドリュー
ズが、一番サイズの大きい服を手に取り、身に着け始めた。
「そっか、ヴァルは東方の出身だったもんな」
二人は、ヴァルドリューズに教わりながら、なんとか服を着る。
「お前の国でも、こういう服装だったのか？」
カイルが尋ねる。
「少し違うが、チョウの出身であるタイラでは、砂漠もあるため、主にこのような服
装だった。国が近い故、私の国でも、このような服も出回ってはいた」
腰にサッシュを巻きながら、ヴァルドリューズは淡々と答える。
「宮廷では、どんな服だったんだ？」
見よう見まねでサッシュを巻きながら、今度はケインが尋ねる。
「白い詰め襟の、裾の長い服だ」
やはり、淡々とした口調で、答えが返る。
二人は、普段の黒いマントに身を包んだ彼を見慣れてしまっていたが、ヴァルドリ
ューズは西洋系の整った顔ではあるものの、本来は東洋人であり、肌も浅黒いので、
今着ている白い色は映えていた。
その様子からは、彼の出身であるラータン・マオの宮廷魔道士の衣装という白い詰
め襟服とは、黒いマント姿とは違う印象で、しかも似合っていただろうと思わせる。
「俺たち、結構似合ってない？」と、カイルが得意気に言った。
仕上げに白いターバンを巻いた彼らは、西洋の衣装を見慣れたカイル、ケインから
すると、まるで、謎の外国人三兄弟のように思えてしまい、爆笑していた。
もちろん、ヴァルドリューズは、笑ってはいなかったが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3151y/

『Dragon Sword Saga３』砂漠の謎

2011年11月22日02時53分発行